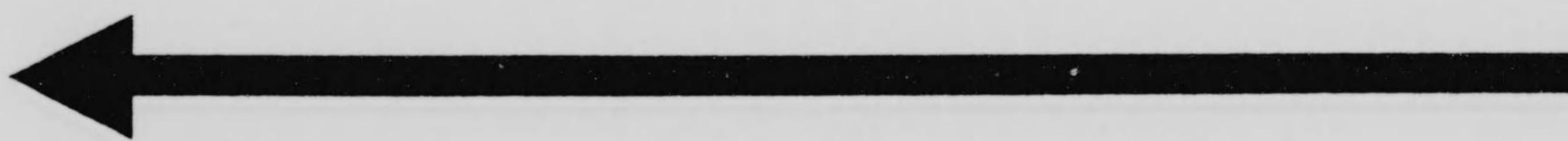


363  
110

0<sup>m</sup> 1 2 3 4 5 6 7 8 9 15<sup>m</sup> 20<sup>m</sup> 1 2 3 4 5

始



11-177

363-110



加藤高明論其他

横山雄偉著

大正  
6. 3. 30  
内交

## 序

千九百十一年から十二年にかけての T. P.'s Magazine の巻頭には、主筆 T. P. O'Connor 氏の筆に成る人物論が、大抵毎號掲げられた。其の中には、歐米現代の政治家、軍人、學者、發明家等、あらゆる階級の人物が網羅された。殊に氏自身が下院議員であつた所からして、英國政治家の人物評は、一層の興味を以つて讀まれた。O'Connor 氏はよく人物の心理的研究と云ふ。如何にも氏の筆に成る人物論は、慥に心理描寫に力を注いである。併し私は其れ以外に、印象描寫をも氏の文章の特色に數へたい。

氏は自ら接觸した人物の批評に、よく此の印象描寫を用ゐて居る。

二

漢籍の人物評は、獨斷に満ちた議論で終始してゐる。此の流れを掬んだ日本の人物評も、亦た獨斷的な議論が多い。大抵常套的な形容詞を用ゐて、善人か悪人か、英雄か馬鹿かに取極めてしまふのが常である。私は嘗て文章家は實際家に非ず、實際家の批評は、他の實際家に非ざれば出来るものでないと信じた位である。偶々 O'Connor 氏の筆に成る人物論を讀んで、從來の不滿を癒すことが出来た。今一步進んで自然主義派の小説家の態度を以つて、描寫に力めたならばとさへ思つた。私は此の

希望を『世界雜誌』に試みて見た。(世界雜誌とは、私が一切賣らない方針で發刊して、友人や先輩、扱ては話の分りさうな政客や學者に配布してゐた雜誌である。然るに私が常々口にする如く、文を作るは金を作るよりも難しで、對人要件の爲めに日夜激忙な私に取つて、責任ある文章を、月に一回雜誌に載せることは、中々容易な仕事でない。半日靜座して筆を執ることは到底不可能である。本書に收めた各篇も、一回に書き終つた物とては一つもない。三枚書いては來客に接し、五枚書いては他の要事に掌ると云ふ有様であつた。折角の友人達の勸説にも拘はらず、とう／＼一昨年以來休刊にしてゐる)。

三

専門の文士でない私、寧ろ文事には素人の私の作である爲めに、餘程大目に見て呉れた故でもあらうか、先輩や友人仲間では可成り評判が宜かつた。中には、從來の人物評の型を打破して、新生面を開いたものだよ、など、褒めて呉れる人もあつた。私も此等の賞讃に氣を得て、一時は非常に熱心になつたが、前に言つたやうな理由で、とう／＼休止してしまつた。

下手の横好きとでも云ふのか、難事業と知りつゝ、私は子供の時から文章を作ることが好きであつた。今色々の希望、野心を有つてゐる中に、是非此の印象描寫の行方で人物論の大作をして見たいと云ふ希望、野心がある。今日此の未製品を單行本

にして、再び世に公にするのも、將來機會を得て、此の事業を繼續し、完成したいと云ふ希望、野心の一端の發露に外ならないのである。

本書の刊行に際して、内容の整齊、冊子の體裁等悉く親友室伏高信君の考慮を煩した。茲に謹んで其の好意を謝します。

大正六年三月九日

大森海岸の僑居に於いて

著者

「加藤高明論其他」目次

✓□加藤高明論

一 原 敬……………四二

一 ドレーク……………四四

一 田山花袋……………四六

一 大谷光瑞……………四八

✓□花井卓藏論

一 カイゼル……………七二

一 常陸山……………七四

一 チャムパーレーン……………七六

目次

□田川大吉郎論

七九

□秋山定輔論

一〇一

一 山路愛山

一三四

一 市川八百藏

一三六

□長島隆二論

一三九

一 市川左團次

一七〇

□猪股勲論

一七三

一 ボナー・ロー

二〇二

一 ヴァンダーベルト

二〇四

□風間禮助論

二〇七

一 ビスマルク

二二六

一 エフ・イー・スミス

二二八

一 オルガ・ノヴィコッフ

二三〇

□藝術上より觀たる尾崎行雄氏の雄辯

二三三

加藤高明論





加藤高明子

## 加藤高明論

大隈内閣は愈々改造された。成立以來其の中堅であつた加藤男は、とう／＼閣外に去つた。男爵の辭意堅くして、到底留任すまいと傳へられた時、政界の一部では、内閣の留任最早不可能であると噂された。實際上の總理大臣とまで云はれた加藤男を失つた大隈内閣が、是れが爲めに受けた損害は尠くない。併し男の率ゐる同志會は、三名の閣員を出し、最高幹部會が改造内閣成立に先立つて、以前と變らず大隈内閣を援護すべく決定したのを見ても、男の大隈伯及び内閣に對する心理は、従前と些しも變らないと推定される。此の點からして、彼れの内閣に居ると居ないとは、内閣の輕重を來す原因とはならぬ。若し加藤男の有無に依つて内閣の生命に直接影響を與へると云ふならば、それは爲めにする所ある反對黨の言草に過ぎない。加藤男の性格として、彼れが如き事情に依つて辭職して置きな

がら、直に内閣に對して反意を抱くやうなことは斷じてない。男はこう云ふ點に於いて極めて理性的で、紳士的であると僕は信ずる。

加藤男なきが故に、内閣の受ける影響は左程大でないけれども、其の内閣に居ると居ないが、男爵自身の上に生ずる結果は頗る重大である。

加藤男が元老に受けの悪かつたことは、新聞紙などの傳へる以上であつた。斯の如き反感の醸された責任の孰れに在るかは、今の問題でない。兎に角加藤男在るが爲めに、内閣は厭と云ふ程元老の小言を聞かされた。大隈首相の辛勞は、一通りではなかつた。殊に對支交渉の後である。其の事業の大きいだけそれだけ、加藤男に對する元老の非難も大きかつた。

大浦事件に依つて内閣に動搖を來した以前に於いても、以後に於いても、僕は斯の如き希望を懷き、又た懷いて居る。それは適當の時機に於いて、大隈伯が加藤男に地位を讓ることである。偶々大浦事件が突發した。僕の私見に依れば、内

閣總辭職は無用である。若し假に大浦子爵が刑事問題に干繋があるとしても、それは國務大臣の權限外の事を敢てしたのであつて、他の閣僚の與り知る所ではない。(反對黨議員買収が大隈内閣の意圖に非ざるは、天下公知の事實である)よし其の爲した事が國務大臣の委任事項であつても、閣員一致の決意でない限り、内閣全體は其の責めに任じないことがある。最近の實例では、昨年三月、英國の陸軍大臣シーレー大佐が、他の閣員に諮らずして、愛耳蘭駐在軍司令官に或命令を下した結果、士官が續々辭職するに至つた。それが爲め彼れは責を引いて一人辭職し、内閣にはそれ以上の變動を及ぼさなかつた。

萬一大浦内務大臣が、議員買収事件に直接干繋ありとするも、是れが内閣の連帶責任でないことは明白である。然らば如何なる理由を以つて、内閣は總辭職を敢てしたのである歟。反對黨の中には、此事件は連帶責任でなければならぬと云ふ者もあり、連帶責任でないと云ふ者もある。連帶責任論を稱へない人々は、政

治道徳論を振り翳して内閣の處決を通る。僕は今にして尙ほ斯の如き愚論の跡を絶たざるを心外に思ふ。内閣の一員が、同僚の關知せざる間に、自己の職權外の事を敢てしたのに對して、他の閣僚が同一の責任を執らなかつたとて、何で是れが政治道徳に違反する歟。若し同様の責めに任じて辭職するならば、それこそ内閣員として、此の上なき無責任、不忠實の所爲ではない歟。斯の如き舊式の愚論は、之れを稱ふる者と共に、時代の外に葬るべきである。

僕は總辭職無用と信ずるにも拘はらず、内閣は總辭職を決行した。其の理由は、首相は董督不行届、他の閣員は、首相の推薦に依つて就任したのであるから、總理と進退を俱にすると云ふに在る。然るに爾後の事情は、大隈内閣の留任を餘儀なくした。而かも加藤男は自ら留まるを肯せなかつた。當初彼れは非連帶責任論者であつたさうだが、何故に留任を拒んだのである歟。此の問題に關する男の心理状態は、僕が前に、内閣に居ると居ないと依つて、彼れ自身の上に頗る重大な結果を生ずると云つた一事と共に、精詳な研究を値ひする。

加藤男が留任を拒んだ重要な理由は、大浦子爵に對する義理であらう。前内相が買収事件に干繋ありと假定して、此の事件は、我國在來の内閣の執り來つた traditional policy である。舊式政治家には、善惡の批判を容れない正當の政策と信ぜられて居る。固より大浦子の假定の場合の如き、私利、私慾の念から出たのでは斷じてない。等しく刑事事件と云ふも、渡邊宮内大臣や西本願寺前法主の場合とは全然其の動機、性質を異にする。大浦子の所爲の非にして、思想の謬れることは申すまでもないが、自ら責めを引いて、政治的にも、社會的にも退隱してしまつた彼れの心事は、寔に慙むべく、又た同情に値ひする。まして加藤男に取つては、同志會に於ける唯一無二の補佐者であつた。同情の並々ならざるは當然のことである。非連帶責任論の見地から、依然内閣に踏み留まつて、國家の重きに任ずる

も政治家の所務であり、同僚の心事に同情して進退するも、士人の衷懐である。僕は彼れを取る、加藤男は此れを選んだのであらう。

八

聞く所に依れば加藤男は身を挺んで、大隈首相の辭職の已むべからざるを力説したと云ふことである。加藤男の辭意は、世間では善惡二様に色々と取沙汰してゐる。僕は善意に解して、大浦子に對する義理で辭職したと云つたが、世間では是れさへも惡く解して、大浦子に對する義理と云ふのは口實で、對支外交で失敗した爲めに、又た歐洲大戰後に處する我國外交の困難なるを豫め危惧するが故に、此際此事件の突發を好機會に逃げ出したのだとも云つて居る。又たこんなことも傳へられる。大隈内閣の前途には、幾多の難關が横はつてゐる。海軍補充計畫より來る豫算編成難が其の第一である。長く續いた所で、來議會無事通過は覺束ない。それまで内閣を持續けて行かうとすれば、惡は最惡となる。内閣は愈々みぢめな

最後を遂げなければならぬ。加藤男は其處を看越して去つたのであると云ふ。

一寸政治の黒人らしい者の云ひさうなことである。併し是れは自殺論である。内閣のあの状態を、抜き差しならぬ行詰りとする觀察である。英國人の氣風、政治振りを最も宜く理解した聰明慧敏な加藤男の賛成せざる所と、僕は確信する。倒れるならば、議會で堂々と政策を提げて戦つて倒るべきである。戦つて倒れるは、立憲政治の常道である。自殺は卑怯だ。

復た斯の如く評するものもある。加藤男は、自分が留任を肯ぜなければ、大隈内閣は到底倒壊の外はない。後繼内閣組織の番は、何人に廻り來るか。順序から云へば、政友會に廻らねばならぬが、今の政友會は其の實力と聲望とを有たぬ。プロバビリティーは超然的政治家の上に在るが、是れとても政黨の力の擴大された今日となつては、最早出來得べからざるのことである。觀來れば内閣組織の實力は、同志會を除いては外にないのだ、同志會の總理たる吾輩を措いて、他に後

九

一〇  
繼内閣の組織者はないのだと、加藤男の野心が動いたと説く。

僕はその場合加藤男が、斯る野心を包藏して辭職を首相に逼り、續いて留任を固辭したとは、どうしても信じ得ない。政治家は野心家である。併し此の際此れ程の野心の實現をたくらむべく、加藤男は餘りに手堅い、一本調子の人のやうに思はれる。

僕は斯の如く彼れの心事を忖度するにも拘はらず、大隈内閣が辭表を提出した脚下に於いて、こんな計案を想像した。元々大隈内閣は辭職すべきものではなかつた。併し一旦辭表を提出した上は、留任すべきものでない。而して内閣總辭職の原因は大浦事件であつて、其の政策は國民の不信任に問はれた次第でもないから、後繼内閣は其の政策の賛成者に依つて組織さるべきである。のみならず政黨主義の現代である、又た最近の解散で、下院に於ける與黨の多少に依つて、内閣の存

亡を決した今日である。衆議院に多数を有する政黨こそ、内閣組織の資格者である。偶々加藤男は其の多數黨の首領なるが故に、後繼内閣の首相となるべきである。但だ同志會のみでは、まだ過半数を占め得ないから、同志會と共に大隈内閣の政策を翼賛し來つた中正會と聯繫せなければならぬ。取りも直さず次の内閣は加藤、尾崎兩氏の聯立内閣であらねばならぬ。是れが憲政の本筋だ。

是れは僕の斯くありたいと云ふ希望であり、斯くあらねばならぬと云ふ理想であつて、斯くある現實でなかつた。内閣製造者たる元老が、彼等の忌み嫌ふ加藤男を、後繼内閣の組織者に推薦しやうとは、どうしても想へなかつた。其の時僕は、加藤男なくとも大隈伯は、必ず留任するに相違ないと信すべき理由を見出した。そこで曩に懐いた計畫が腦裡に復活した。それは群議の焦點となつてゐる加藤男が、息抜きに一時内閣を去ることである。今此の際に内閣を去るならば、大浦子に對する男の心盡しも果される譯である。是れを政治的に見るならば、次の機

會を捉ふべく暫く世の視聽を遠ざかるのである。壹箇月前に畫いた此の案が、目前の事實に依つて、意味ある復活をした。

此の目的からして、僕は加藤男が外務省に對して、餘り責任ある干渉を敢てせざらんことを希望する。後任者の推薦は、大隈首相及び内閣との干繫上、是非骨折らなければなるまい。又こう云ふ干繫がある上は、外務省の幹部は從來の儘に残されるであらう。果してさうであるならば、後任者に推薦される人々も、必ず二の足を踏むであらう。露骨に云へば加藤男の次官たるべく、外務大臣となるわけだから、珍田子は謝絶したさうだ。本野男や林權助男に交渉されたことを聞かぬ。石井菊次郎男が直ぐ承諾したのは當然である。必ず來るべき結論である。但だ結論の到來が早過ぎた。よし順序宜く珍田、本野、林と持廻つても、彼等は石井男と同じ條件では、屹度受けなかつたらう。併し加藤男としては、せめて珍田子に對しては、あらゆる手段を盡しても、承諾せしめねばならなかつたのである。

噂のやうに幣原喜重郎君が次官に榮轉するならば、愈々まづい。此の措置は、加藤男の規模の小を現すばかりでなく、閣外に去つた後の彼れをして、尙ほ功罪共に責任を免れしめぬことになる。男の政治的將來に累ひすること尠くあるまい。

嘗にそれのみでない、過去一年四箇月、大隈内閣に於ける男の經歷は、絶えず元老に對抗し來つた所に異彩と意義とがある。然るに彼れ自ら元老然として、閣外から外務省にある自家直系の乾分共を指揮するとせば、彼れ亦た咎めて其の咎めに倣ふ者ではない歟。諱むべき惡例を造るものと云はねばならぬ。

英國の青年の理想は、牛津か劍橋大學かに在つて、テームス河の端艇競漕に勝利の月桂冠を擔ひ、卒業した後、ロースチャイルド家から妻を貰ふに在りと、十五六年前何かの本で讀んだことがあつた。そして其の本には、ローズベリー卿こそ此の理想を實行した人だと書いてあつた。

日本にも是れに似寄つた人があるかと考へてゐた時、加藤高明男のことが想出された。彼れが隅田川の端艇競漕で勝利の月桂冠を獲たか、或は端艇を漕ぐことさへ出来ない人ではないか、そんなことは知らないが、帝國大學出身の俊才で、日本一の富豪三菱家の婿であることだけは、如何にもローズベリー卿に似てる。さう思ふとまだ外にも似た所がある。ローズベリー卿も外交家出身で、大政治家グラッドストーンに愛されて、僅か三十八歳で、工務院總裁となつた。四十八歳の時には、虞翁の後を承けて首相となつた。加藤男は大隈伊藤の二大政治家に重用されて、破格の顯達を敢てした。三十五で英國公使に任せられた一事は、之れを證して餘りある。彼れが第四次伊藤内閣に入つて、初めて外務大臣となつたのは漸く四十一であつた。ローズベリー卿に匹敵する昇進である。故ステッドがローズベリー卿を評して、政治家には、身體のどこにか針で衝いても感じない處がなくてはならぬ。然るに口卿は頭髮の尖端から爪先きまで感じのないと云ふ所がない。

あれでは大政治家にはなれぬと云つた。此の邊もどうやら加藤男の性格に似てるやうに思はれた。

こんなことを考へた明治三十三年の頃、いつとはなしに僕は、加藤男の人物研究を始めてゐた。

伊藤内閣に次いで出来た桂内閣は、どう云ふものか蟲が好かなかつた。此の嫌ひな桂内閣を、僕の最負の政治家大隈伯と伊藤公とが、各々其の統率せる憲政本黨と政友會とを提げて粉碎しやうと企てたと新聞で見ながら、僕の少年らしい政治的興味は最高潮に達した。そして兩黨の總裁が、二十年前の舊盟を更むべく會合したのは駿河臺の加藤邸であつて、兩雄の提携を策したのも、實は此の壯年政治家であつたと聞いた時、是れはローズベリー以上だと案を打つた。

其の頃であつた、藏前の梅若に能を看に行つた。開演を待ちつゝ、看客席を見廻してゐると、正面席に、新聞雜誌の寫真で見覚えのある加藤男を見出した。同席

の紳士は、前年僕の郷里で中學校長をしてゐた隈本有尙氏であつた。二人とも脊廣で、きちんと坐つて、ひそ／＼話し合つてゐた。僕は隈本氏が福岡で、喜多流の古老梅津只圓翁に就いて謠を學んだことを知つてゐる。或る大祭日の式場で、氏の勅語を捧讀する音調の謠式であるのが可笑しいと云つて、くす／＼と満場の靜肅を破つた學生があつた。その爲め此學生は退校を命ぜられた。こんな一つ話が校長の謠曲と因縁して、吾々の中に残つてゐた。

僕はこんな記憶を喚び起しつゝ、二人の顔を眺めた。大抵年配も似寄つてゐる所を見ると、大學時代の友達で、いゝもあつたらう。隈本氏は喜多流であるが、加藤氏は何流であらうか、まさか喜多流でもあるまい。座席が離れてゐて、其の膝の前に披いてある謠本が見えないから、流儀の判斷もつかかなかつた。

二番ばかり済んで、僕は便所に行つた。不圖僕と並んで用を達してゐる紳士を見ると、外ならぬ加藤男であつた。見上げるやうな大男であつた。あの高い大き

い鼻、底光りのする眼、廣い肩幅、昔も今と同じであつた。但だ若かつたゞけに、顔の色が宜く、頭髮も多くて艶があつた。

僕は不便さうに下駄を突かけて出て行く彼れを見送つた。手を洗はないのが、特に僕の注意を牽いた。紳士らしくない、潔癖でない、意外に思はれた。其の後英國人は便所から出ても手を洗はないと云ふことを聞いて、は、あ是れが加藤男の英國式な所だなと思つた。

加藤男が第三次桂内閣に入つてから、僕の思想は又た男と交渉することが尠くなかつた。僕は當時熱心な政友會主義者であつたから、國民の怨府となつた、末の見込のないあんな内閣に、遷々英國から歸つて來て入閣する男爵の氣が知れなかつた。彼れは伊藤、大隈兩先輩の門に政治的徒弟奉公をして、初めての入閣は第四次伊藤内閣、二度目の入閣は第二次西園寺内閣に於いてであつた。殊に曩には



伊藤、大隈の聯繫を策して、第一次桂内閣を包圍せしめたことすらあつた。西園寺内閣では、例の鐵道國有に反對して、直ぐ挂冠したけれども、其の政治的系統から云へば、どうしても桂内閣に入る人とは思へなかつた。外務大臣に黨派觀念などのあるべきものでないと云へばそれまでだが。

『加藤と云ふ男は、元來が大臣病患者なんだらう。大臣にするときへ云へば、どんな犠牲でも拂ふさ。三十九年に西園寺内閣を飛び出して不遇であつたのを、桂は舊怨を忘れて、色々と羅致策を講じたものだ。男爵になつたのも桂のお蔭さ。それに今度は桂が新政黨を組織して、加藤を後繼者にするに云ふ條件で呼んだのださうだから、加藤も此の順で行けば、桂の後を承けて總理大臣になれるとでも思つてゐたらう。』

こんな風説をも、一通りは信じた。

大正二年二月八日の午前、加藤男は桂首相の命を銜んで、政友會本部に西園寺

總裁を訪ねた。内閣瓦解か、議會解散か、どちらにしても大悲劇で終らねば濟まぬ戯曲の其幕間の停會中であつた。本部の樓上樓下は、憲政擁護、閥族打破の抽象文字に熱狂した黨員で充たされてゐた。五日の内閣彈劾の議會で、心往くばかりに桂首相を敲きつけて置いた、八分の勝味はこちらに在ると、解散を厭がる代議士でさへも、意氣昂然となつてゐた。そこへ加藤外務大臣がやつて來た。好奇心はいやが上にも高くなつた。

要件は、桂首相が西園寺總裁に會見を申込んだのださうだと傳へられた。此の風説は事實となつて、其日の午後、首相官邸に於いて兩政治家の會見が行はれた。形勢は愈々物々しくなつた。翌九日西園寺侯が宮中に召されて内勅を賜つたと云ふ報知は、吾々に切ない、頼りない不安を與へた。其の夜、駿河臺の西園寺邸に於ける、國民黨の犬養總務を加へた政友會の領袖會議は、愈々悲劇が大團圓に近づいたことを暗示した。

英國に於ても諒闇中には、陛下が政争に干渉し給ふことがあると云ふ獻策を、加藤男が桂公にしたと傳へ聞いた時、僕は床に唾して罵つた。

『諒闇中だから、政府と反對黨とが御遠慮致して、政争を避けるのが本來だ。陛下の干渉と云ふが、英國と日本とは國柄が違ふ。英國では陛下のお言葉でも御受けせなくて済むが、日本ではさうは行かぬ。それを英國流に無暗と詔勅降下を奏請されて堪るものか。』

僅か二三箇月間に、政界の状態と共に、僕の氣分も激變した。七月十四日、田川大吉郎氏の洋行を、國府津まで送る汽車の中で、氏から桂公危篤の報を聞いて以來、僕の頭腦は絶えず吾々の政治的企畫の中心人物と云ふ問題にのみ集注された。桂公の病勢は一進一退で久しく續いた。其の間安心したこともあつたが、とても再び政局に立つ望みはないと諦めをつけた。田川氏は汽車の中で、『仕方がな

い寺内伯でやるさ。』と云はれた。併し僕はどうしても腹がきまらなかつた。

或時僕は長島隆二君と、政治上の計畫を相談した序でに、久しく胸に秘めて置いた大秘密でも聞く氣で問ふて見た。

『桂公には勿論後繼者はきめてあるだらうね。』

『それはちやんときまつてるよ。』

長島君は輕快に答へた。其のにこ／＼してる顔を見、滞りのない返事を聞いて、僕は後繼者の何人であるかを突込んで質問する氣がなくなつた。

第三十一議會が近づいた時、吾々同志は營業稅廢止案で内閣を破壊し得るとの確信を得た。其の頃であつた、長島君は至急に僕に面會を求めて、熱心な調子で加藤内閣の成立を豫想して、尾崎氏入閣の承諾を得て呉れろと頼んだ。

どうも加藤男ではと危まれてならなかつたから、久しく胸に納めたまゝであつた。大正三年の正月二日、尾崎先生と鎌倉材木座の尾崎別莊を出て、坂の下の

望月小太郎氏の別荘に遊びに行つた。座敷に通ると、望月氏は直ぐ政治談を始めた。山本内閣も今度の議會で倒れるだらう。後繼内閣は加藤男を首班として造られねばならぬ。尾崎氏も加藤内閣の一員となつて、大に活動して欲しいといふのが、其の要旨であつた。僕は今茲で、豫て胸奥に秘めて置いた案の出口を望月氏に於いて見出したことを、意外にも、愉快にも思つた。そこでちよい／＼同様の意見を挾んだ。尾崎先生は黙つて吾々の話を聞くのみであつた。

同じ月の十六日、前日に歐米漫遊から歸朝した田川氏と同行で、再び尾崎氏を鎌倉に訪ふた。再び加藤内閣問題が持上つた。今度は尾崎先生も或條件付きで承諾された。

シーメンス事件が突發した爲めに、山本内閣も是れを動機に倒れてしまつた。後繼内閣組織の大命を拜した清浦子爵は、閣員の顔觸れを揃へ得ないで、此の名譽を抛つた。此等の運動中に、吾々の中には、もう大隈内閣といふ觀念が行き渡

つてゐた。加藤内閣は夢のやうに消えてしまつた。

清浦子爵が全く内閣組織に絶望したのは、四月七日であつた。これまで元老會議に出席したのは、山縣、大山、松方の三老であつた。此の上は井上侯の出席を俟つて、後繼首相の推薦をする外はなかつた。僕は望月小太郎氏に蹤いて、井上侯を迎へに行つた。借切りの列車内には、老侯夫妻に令嬢と家令の外は、國府津から乗つた野田卯太郎氏ばかりで、望月氏が一人で切つて廻した。品川停車場で下車して、半身不隨の老侯を自動車に扶け入れた望月氏は、がっかりして停車場前の休憩所に這入つた。

「加藤男から此處に電話が來ることになつてゐるから、君宜しく頼むよ」と、望月氏は葡萄酒を口にしながら云つた。僕は時計から目を離さないで、約束の時間を待ちつゝ、女中に頼んで電話をあげて貰つてゐた。二分と違はず、其の時間に電

話が来た。男爵自ら電話をかけてゐた。望月氏は言葉に力を籠めて、今日の上首尾を報告した。僕は此の電話に依つて、大隈内閣組織計畫に對する加藤男の熱心を知つた。

十二日午後大隈伯に大命が下つた。翌十三日午後一時、尾崎氏は招かれて大隈邸に行つた。けれども内閣組織の方法に關する意見を異にした爲めに、入閣を拒絶した。十四日の朝四時、永井柳太郎君が、品川の尾崎邸を訪問した結果、其の夜七時、尾崎氏は又た早稻田に行くことゝなつた。

隨行の田川氏と僕は、玄關右側の應接室に案内された。同志會の代議士連七八名、咽せかへるばかりの煙草の烟の中に、額を鳩めてひそ／＼話してゐた。僕等が這入ると、町田忠治君と藏原惟郭君が起ち上つて、僕等を隅の方に引張つて行つた。

『茲は尾崎君に我慢して貰はなければならん。大事の前だ。今不承諾と言はれて

は、又た政友會のものになる。どうか今夜は承諾するやうに盡力して呉れ給へ』と、切なさうに搔き口説いた。

すると室の片隅の椅子から身を起したモーニングの紳士が僕の前に來て、

『あの節は失禮しました』と、非常に鄭重な挨拶を繰返しくした。僕は濛々たる煙の中に眼を据えて、此の紳士の顔を見詰めながら、想ひ出さう／＼と力めた。霎時すると其の短く刈り込んだ上髭や、餘り廣くない額の恰好やら、凹んだ眼に掛けた眼鏡の具合などからして、昨年夏、桂公が鎌倉に病んでゐた時、長谷の三橋旅館で逢つたことのある江木翼君であることを想ひ出した。

江木君は官僚出身だけに、町田君や殊に藏原君などよりは、上品な鄭寧な言葉で、尾崎氏に入閣を承諾されるやうに説いて呉れよと頼んだ。僕は昨日來の形勢に就いて、江木君に訊いたら判るだらうと思ふ或る疑問を有つてゐた。そこで江木君を促して、客間と食堂との中に在る長い廊下を通つて、正面奥の應接室に

行つた。

江木君は僕に口を開かせないで、

『今夜話が纏まらないと、又たく／＼政友會の天下ですよ。お互が昨年来努力したことも水泡に歸します。共同の敵の爲めに忍ぶ所は忍んで頂きたいです』と、婉曲ではあるが、腹の底から出る言葉で僕を説いた。

『此の大事の際ですから、勿論加藤男爵はお見えになつてゐるでせうね』と、僕は突然口を切つた。

江木君は少し狼狽氣味で、

『え、え、』と、半ば肯定するやうな、半ば否定するやうな調子で答へた。

『次の間にお出のやうですな、三人でお逢ひになれば宜いのに』と、僕は些し皮肉に云つた。

其の時、前の廊下を向ふから心配さうな顔付してやつて來た武富時敏氏は、大

隈伯と尾崎氏とが對談中の次の室に這入つた。其處には加藤男が控へてゐるのだ。僕は如何に抑へやう／＼としても、云ひ知れぬ不快の念の込み上げるのを止め得なかつた。

大隈内閣成立と同時に、從來僕が彼等を通じて同志會の事情を知り得た秋山、長島君等は、内閣に敵意ある態度を執るやうになつた。其の目指す相手は加藤男であつた。隨て僕の加藤男に對する善感も、次第に薄くなつた。到底總理大臣の器でないと思ふやうになつた。

それでも内閣成立後間もなく開かれた臨時議會での活動をば、見逃すことは出来なかつた。第三十三議會は海軍豫算の爲めに開かれたのであるから、際立つて加藤男の働く場合もなかつたが、第三十四議會は日獨戦争後、臨時軍事費の協賛

を得べく開かれたのであるから、徹頭徹尾加藤外務大臣は反對黨の矢面てに立ち通してあつた。

政友會は此の議會で、不思議な反對黨心理のありだけを曝露した。彼等は加藤外相に向つて、同じ事を立ち替り入り替り繰り返しく、長時間質問した。精確に言へば彼等のは質問ではなくて、自分の意見を主張しつゝ、政府の外交を攻撃するのであつた。彼等の議論を詮じ詰めれば、日本は獨逸に對して宣戰した結果、今後永久に此の強國から恨まれることを覺悟せなければならぬ。是れは我國に取つて由々しき事柄である、非常な犠牲である。政府は日英同盟の義に依つて、斯く決行したと言ふが、其の時機は果して宜しきを得た乎、其の折衝方法に手落ちはなかつた歟。獨逸を餘りに見縊びり過ぎた政府の觀察は謬つてゐる。現に歐洲大陸に於いて、聯合軍の形勢は日に／＼悪く、支那海、南洋方面に於いても、世界第一の海軍國たる英國の利權は、彼れが如く脅かされてゐるではない歟。何を慌

て、戰爭に参加したのである歟。今暫く悠然と傍觀してゐたならば、更に有利な地歩を占め得たものを。日英同盟に縛られ、サー・グレーに願使される如き加藤外務大臣は、自國の利害よりも、より多く英國の都合に懸念した、と云ふことになる。

彼等は政府が日本に不利な約束を、英國との間に結んだに違ひないと云ふ疑惑を、最後まで持ち續けた。そして倫敦タイムスの記事を引用して、此の疑惑の裏書にしやうと企てた爲めに、加藤男をして威猛高になつて、『諸君は自國の外務大臣よりも、外國の新聞紙に信を處くのであるか』と憤慨せしめた。

此の疑惑の論調は、總選舉後の第三十六議會に於いて、日支交渉の質問戦に一層著しく現れた。交渉進行中、自國に不利益な言議を敢てしてまでも、政府攻撃に熱中した反對黨の人々は、第三國人をして聞かしむれば、支那政府の爲めに言ふのではあるまいかと疑はれる程に不謹慎な議論を試みた。要するに彼等は對支外交は全然失敗だ、此の失態の爲めに内閣は總辭職を斷行せなければならぬと云

ふ決議案を提出したのであるから、以つて其の意見、議論の内容も想察せられるのである。

日獨開戦問題と云ひ、對支交渉問題と云ひ、奇異な政治現象を惹き起したものだ。議會の速記録は何人も看得る。冷静な頭腦で是れを読む國民は、日本の議會に外交を議する資格ありやを疑ふに極つてゐる。僕はデモクラシーの信者であるけれども、我國議會の現状に對しては悲觀を禁じ得ない者である。さりとて直に是れを鑄直すことも出来ぬ。新しき慣例を造つて、彼等を馴らすの外はない。新しき慣例とは、英國の政府と反對黨とが、外交問題を取扱ふ態度を云ふのである。英國の外務當局者が爲す如く、日本の外務省も、政府の外交方針を、或信用ある新聞紙に掲載して、豫め之れを國民に知らしめる。同時に反對黨の首領に協談する。議會に於いては、開會劈頭反對黨の首領をして質問の形式を執らしめ、之れに對する答辯に依つて政府の政策方針を發表し、更に反對黨の首領之れを賛成して、

双方の妥協が成立つ。此の新慣例を日本に移すには、加藤男が最適任者である。

は男に此の愛國心と野心とのあることを信ずる。

反對黨の言ふが如く、日獨開戦に至る外交、及び日支交渉、共に失敗であつた歟。成功、失敗の文字に依つて仕事の本質は判定出来ぬ。一々事實に就いて批判するの外はない。此の兩事件は、加藤男の政治的經歷のうちで、最も顯著な事業であるから、是れを精細に批評することは、政治家としての彼れを論ずる所以であるけれども、今は其の時機でないと信ずるが故に、僕は是れを他日に保留する。但だ一言附け加へて置きたいのは、議會に於ける反對黨の對支交渉に關する攻撃が、悉く折衝の手續にのみ加へられて、唯の一人も、要求條件の内容批評を試みた者のなかつた事である。此處の遣方が悪い、彼處が拙劣だと手續の批評のみをして居つたところが、それは到底水掛論に終るの外はない。何故に先決問題たる要求條件の内容を吟味し、批評しないのである歟。本來彼等には此種の問題を取

扱ふ準備と資格とがないのである。苟も日英同盟の可否に迄も論及する程ならば、グレー外相の dog in manger policy 位は心得てかゝらねばならぬ。

解散前後の議會に於いて、加藤男は我國現代の政治家中凡向ふ者なき闘將であることを證明した。闘將たるには、知識と辯舌と頭腦の慧敏と精力とを要する。そして男爵は比較的高き程度に於いて、此等の資格を具備してゐる。彼れの政治知識は最も新しく、又た最も廣きに互つてゐる。根柢あり、精鍊したものである。頭腦の慧敏は其の天稟であらう。如何に難問題と見える事でも、彼れに取つては、牛刀を以つて鶏肉を割くの勞にも値ひせぬ。悠然として一氣に、一と口に跳ね飛す。精力の絶倫なことは、其の軀幹の強勁、長大なのを見ても判る。日本人には稀れな體格である。

若し夫れ雄辯は、男が昨年來の政戦で現した特色の第一である。結構と用語と

に於いて、人に目立ない、何とも言へぬ巧妙と工夫とを示す。誇張せず、冗漫ならず、字句に囚れず、常に事實に即して空想と獨斷とを避ける點に於いて、彼れの新式政治家たる資質が宜く現れる。音聲の低いのは缺點である。是れは公開演説の經驗に乏しいからであらう。併し幅はある、底力もある。甲走らない呂の勝つた音は、聴衆に彼れの人物の強味を印象する。彼れの容貌、態度は、些らす其の雄辯を援けてゐる。彼れが幅廣き肩を恃て、握り詰めた兩手を卓上に突き、心持ち前屈みになり、首を左に傾げて右斜に振り仰ぐ時は、弱き老朽巡洋艦を逐ひ散らす超ドレッドノート戦艦の概がある。

昨年來二三次の議會に於ける彼れの闘將振りは、寔に目覺しかつた。國務大臣として是れ位の戰鬥力を示した者は、恐らく未曾有であらうと思はれた。彼れあるが故に大隈内閣は強いのであるとすら思はせた。戦線の闘將としては、現代政治家中無比であると思はせた。



戦線の闘將としての成功は、決して政治家としての成功の全部でない。戦線の闘將は部將に過ぎぬ。部將としての成功は、固より總大將の成功でない。僕は加藤男に就いて色々研究して見たが、未だ總大將としての器量、戦略を認める機會、材料を發見し得ないのを遺憾とする。強めて求めるならば、同志會の統率振りを男の將帥としての器量と云はふ歟。或は内閣辭職後、後任外相の推薦、及び外務省に對する態度などを以つて、男の將帥としての戦略とも見るべき歟。若しさうとすれば、孰れも男に取つて不幸な判定を下さざるを得ないことになる。

政治は戦争である。政黨は艦隊のやうなものだ。二十五節から十五節までの速力の種類の軍艦を揃へた時には、最低速度の十五節を標準として趁るの外はない。政治上の戦ひに於いては、理と數以外に、勢ひを最も多く打算せなければならぬ。凡感俗情は民衆政治に於いて、常に對照の基礎となる。加藤男は理と數を知るに於いて、最も勝れた智能を有つてゐる。而かも勢ひを見るに於いて如何。僕は男

の政治的經歷に於いて、此の能力の發揮された實例を未だ見たことがない。

僕は加藤男が同志會の總理として、最善を盡しつゝある心事を嘉みし、勞を多とする。あんなに同志會がごたくやうでは、加藤も長くは辛抱し切れまい。もう飽き々々したかも知れぬ。遠からず投げ出すだらうなど、云ふ者が尠くない。併し僕は政黨に關する男の觀念、心理に就いては、彼等と全然異つた觀察を有つて居る。加藤男が同志會に入つたのは、普通の意味で云へば、非常な冒險であつた。そして此の冒險の自覺は、何人よりも加藤男自身に於いて、最も強く、鮮かであるべき筈である。そこで入黨の際、彼れの政治的將來を、如何に政黨と終始せしむべきかは、あの用心深い、冷靜な頭腦で、残りなく考究し盡したに相違ない。

獨斷かも知れないが、僕は男の最も大なる政治的野心は、英國流の政黨政治を

日本に實現するに在りと信じてゐる。是れは男の自信を斯くあるべしと推定したのであるが、客觀的に云つても、彼れは此の信念の實行者として、現代第一の資格者であることは否まれぬ。結論は、此の信念實現の第一着手として、同志會の首領になつた上は、多少不如意なことがあつたからとて、容易く之れを拋棄する筈はないと云ふことになる。

加藤男は偏狹、傲慢だと云つて、世間の非難を受け續けてゐる。斯く噂の高いからには、偏狹、傲慢な所があるかも知れぬ。僕は親しく接したとがないから、固より事實の有無は知らないが、彼れの經歷から見ても、恐らくさうだらうと推測してゐる。彼れは明治十四年二十二の歳、最優等で帝國大學を卒業した。學生中頭腦の明敏と成績の拔群なので、他を壓してゐたと云ふことである。卒業後三菱會社に入り、岩崎彌太郎に見出されて、其の長女を娶つた。日本第一の富豪の婿

となることは、人間の一大事である。新井白石のやうな見解で、富豪の婿たることを拒むのは、大なる見識である。加藤男のやうに之れを承諾したからは、是より生ずる影響を適度に取捨するに、非常な力を要する。加藤男であつたればこそ、其處を巧みに鹽梅したと思はれる。あれが平凡な男であつたならば、嘗に傲慢偏狹どころでない、恐らく狂氣したであらう。

彼れの世間的幸福は此に止らなかつた。明治二十一年黒田内閣に於いては大隈外務大臣の秘書官となり、尋いで調査局長に擧げられ、其の後大藏省に移つて二十五年には主税局長となつた。年僅に三十三であつた。それのみでない、二十七年には、伊藤内閣に拔擢されて駐英公使となつた。三十五歳の公使は、特に何等外交官の經歷なく、大藏省の屬僚から一躍此の榮位に登つた者は、日本には前に例なく、後には勿論あるべしとも想はれぬ。後日彼れを超えて、外交家の第一人者になつた小村壽太郎侯は、年こそ五歳上の四十であつたけれども、やつと北京

公使館の書記官に過ぎなかつた。加藤男は明治三十三年二月、林董伯と代つて歸朝し、十月第四次伊藤内閣に入つて外務大臣となつた。此の時年四十一。經歷の一斑斯の如し。眼人類を空しうするの概あるが普通の人情である。

若し加藤男が生活問題とは何ぞやと云ふ問題を提げて、天下を見渡されるならば、面白い結論に達するだらうと、僕は嘗て考へたことがあつた。天下の人間、殊に日本で政治家と稱せらるゝ者は、殆んど悉く生活問題に屈託してゐる者のみである。喰ふに困らないまでも、金には困り切つてゐる連中である。加藤男は自己の境遇と引き較べて、彼等の状態を何と看られるであらう歟。

人間に一番辛いものは貧乏の経験であつて、又た人格を陶冶する上に、なくてはならぬものも貧乏の経験である。貧乏の経験のない加藤男は、稀有の幸福者であるが、或は又た不幸者と云ふ結論に陥らないとも限らぬ。大政治家に要するものは、理想と思ひ遣りである。僕は加藤男に理想のあることを疑はないが、思ひ遣

り、殊に貧乏者揃ひの政友に對する思ひ遣りが、首領相應にあるかどうかを知らぬ。若し思ひ遣りがないと假定して、此の缺點が貧乏の経験のない所から生じたものとすれば、加藤男の境遇は一面甚だ不幸なものになる。

本年三月の總選舉は、日本の憲政史に新しき足跡を残した。初め大隈内閣は少數黨を基礎として成立した。總選舉の結果、下院に於ける内閣の與黨が依然少數であつたならば、内閣は總辭職を執行した筈である。幸に多數であつたが爲めに存続した。言葉を換へて云へば、衆議院に於ける與黨の多寡は、内閣の存亡を決する。日本はこゝまで來た。吾々は是れを銘記せなければならぬ。約四半世紀前にスペンサー・ワルポールはこう云つた。「國務大臣が議會に協議する時には、下院と協議する。女皇が議會を解散遊ばす時は、下院のみを解散される。新しき議會とは、單に新しき下院のことである」。此處に眞理があり、力がある。英國の議會政

治を云ふのではない、最近我國に行はれた總選舉の立憲的意義を、大隈内閣の存續せる此の現前の事實に依つて闡明せんとするのである。

此に於いて僕は、希望に煌く加藤男の政治的將來を一層重視する。矢張り時は必ず進歩を齎して居る。今日の時勢に在つて、世界の進歩に洩れることは、日本人が擧つて力めやうとするも不可能である。幾多の反對論が續出するに拘はらず世界の進歩的大勢は政黨政治に歸向する。今度の解散、及び總選舉と云ふ大事件に依つて、日本も此の大勢の順應者であることを證據立てた。加藤男が一大冒險を敢てして、同志會に入つた初志は、今度著しく實現されたと云ふものだ。彼れは今政治的興味の絶頂に立つて、流れ行く潮の一波をも見逃すまいと努めつゝあるであらう。

——大正四年八月十七日——

## 原 敬

四二

兎も角も原敬は政界の大立物だ。推しも推されしめぬ政友會の實際的首領となつた。名義上の總裁となるのも遠くはあるまい。原敬と云へば力士太刀山を聯想される。併しそれは目今の角力界に於て、太刀山が天下無敵である如く、原敬も政界に於いて、無類絶群の傑士であると云ふのではない、斷じて無い。併し其遺口、相撲振り、又は強奪

の點も相似て居ると謂ふのである。太刀山は強い割合に、不人氣な力士である。或は、あまり

強いが爲めに、人氣を無くした

のだと云ふかも知れない。併し\*

と云ふ。是れは事實であらう。が、それにも拘はらず、幾場所も續けて、十日の相撲に、十日ながら勝ち得るのは彼である。



\*常陸山が同様に強かつたとしても、彼れは、太刀山よりも、より多く人氣を博し得べき性質の人である。世間では、太刀の相撲振りに味がないと云ふ。仕切りに穢い所がある

吾輩は、原敬とは、立憲政治に對する大部分の理解を異にする者である。彼れは、政黨を目して、營利會社の如くに心得て居る。政治家としての彼れは、極めて舊式な者である。吾輩は、斯の如き政治家と終始一貫して戦闘すべき運命を有することを自覺して居る。併し原敬の偉い所は、ちやんと認めて居る。其

の政治家振りは氣に喰はないが、恐ろしく腕の利く所には敬服する。

彼れは、太刀山の如く、今の政界では、最も多くの星數を取り得る政治家である。犬養は一人宛の取組にかけては、現代無比である。又た小數の腹心、及び是れに繋がる三四十人の黨員を握り締めて、意の如く引廻す力量は偉いものである。併し彼は、小數の奇兵隊長たるを免れない。大軍を動かして、歩武堂堂と進退せしめる點に於ては、原敬の獨擅場である。

戦線の圖將として、尾崎は、明治の政界以來、眞に第一人者である。此所で相對抗せしむれば、原敬などは、手も足も出せない。加ふるに尾崎は、加藤高明と共に、立憲政治に關する理解の最も進歩したる人である。併し原敬は、尾崎の如く、戦線にのみ働いて、司令部と兵站部とを閑却するやうな缺點を有しない。且つ又原は、土俵際の投手の利くことに於いて、尾崎の及ぶ所でない。加藤高明は、頭腦の明晰と人物の堅實なことは、國民の信頼を繋ぐに足りるが、何しろあの偏狹と片意地とで不人氣なこと夥しい。後藤は、もう落伍者になり果せたやうだ。さなくとも、彼れは、元來が政治的技師に過ぎない。非凡な技師だけに使手の桂が死んでからは、益々行場に窮してしまつた。加藤や後藤に較べれば原は政黨の首領として、遙に有利な素質と手腕とを有して居る。彼れの短所は、政治に對する理解の間違つてること以外に、土俵際の投手に依頼し過ぎて、遠き處りを缺くことである。薩岡との俱倒れなどが、手近な著しい實例だ。松田が居て、漸く此の短を補つた。松田亡き後、殊に名實共に總裁たらんとする原の政友會に於ける遺口は、蓋し政治的興味の頂上である。(大正三年七月)

四三

## マリオン・ドレーク嬢

四四

最近に行はれた東京市會議員の選舉では、三十年來市政を壟斷して、横暴を極めた常盤會が散々に切憐まされ、首領の森久保作藏は、無残に落選してしまつた。東京市の常盤會と、何時も引合ひに出されたる紐育市のタマニー・ホールに、好一對の團體が市俄古にもある。其の首領は同市の第一區から市會議員に出て居るジョン・カフリンと云



\*たる、米國の腐敗政治に必ず  
涌く所のホスの親玉である。  
併し米國人は、革新の人類  
である。頼らば大木の蔭、長  
い物には捲かれるなど、云ふ  
思想が、日本人のやうに強く

己及び自派の利益を計るに汲々\*  
ない。相手が強ければ、尙ほ威勢宜く楯を突く。ルーズヴェルトでもウイルソンでも、既に疾くホス征伐に着手した。有力なホスは味方に引着けると云ふやうな、政友會式な遺口とは違ふ。日本では、やつと今日になつて、非常盤會の聲を擧げた位だが、米國では、カフリン征伐に、マリオン・ドレークと云ふ婦人が、挺身馬を陣頭に進めたから偉いちやないか。

ドレーク嬢は四十年配で、從來些しも政治に干繋した經驗はない。但だ司法記者を勤め現に市俄古司法

組合の一人であるから、同市の司法事務や、第一區の事情には精通して居る。非常な精力家で、又燃えるやうな熱情を有つた米國に在りさうな婦人である。

嬢は、後援團體の公認を受けて、候補に立つた譯ではなく、寧ろ初めは其れを辭退した位であつたが、カフリン派の横暴は彌が上に募り、時事日に非なるを見て、健氣にも、此際戦鬪の渦中に身を投ずるは、吾が義務なりと觀念して、扱ては名乗りを擧げた次第である。

嬢の此の殊勝な態度に發奮して、正義の念に厚い米國人は、幾百人となく、嬢の運動に加擔して、日夜健奔して呉れたが、遂に嬢はカフリンの爲めに破られた。其敗因は、初陣のこゝとして、強固な地盤を有たなかつたこと、運動法に於いて、カフリンに一籌を輪したことの二つである。カフリンは、二十年來此の道に苦勞して來た古武者である。其運動方法は、表面的な演説や主義政見の印刷物配布位のものではない。タマニーが紐育の東部に於て用ひ慣れた戦略を踏襲した。即ち首領と選舉民との個人的干繋の維持、是れである。カフリンは労働者の代表者で、其運動員は、悉く日傭取りばかりである。労働者の個人的自由と云ふのが、彼れの旗幟である。彼の議論は不徹底で、其の修辭は勿論滅茶苦茶で、其主義政見とても固より成つては居ない。けれども彼れは選舉區民の信任と同情とを有つて居る。彼は、彼等の言葉を話し彼等の思想を考へ、そして彼等の投票を得る。理窟に然る可きことだ。

政治は戦争である。名分は正しからねばならぬ。併しながら、戦略、戦術に至つては、敵の有する其等の上に出て、其の裏を掻かれねばならぬ。ドレーク嬢は、惜しい負けをしたものだ。(大正三年七月)

四五

## 田山花袋

四六

目下國民新聞に掲載中の田山花袋の『残る花』は、此の小説家の作中でも、第一の傑作であるに相違ないが、又た日本の文壇に於ても、稀れに見るの傑作だと思ふ。

吾々は、純文學に對しては門外漢である。こゝ云ふ場合の門外漢と云ふ文字は、大抵讀者と云ふ意味であるのだが、正直な所、吾々は、今日の日本の小説家に依つて書かれる小説の讀者である程、彼等の作物に敬意を拂つてゐる者ではない。筆を執るのが彼等の稼業であるから、\*



\*或部分の技巧に就いては、成程商賣人だと思はせる位な上手な點は、勿論あるにはあるが、それは今日の時代思想とは、全然懸離れた荒唐無稽な内容の義太夫を、唯だ美音で語ると云ふ

やうなもので、瞬間的に興味を感ずることはあるかも知れないが、直ぐ馬鹿々々しくなつてしまふ。實人生の苦勞を嘗めた者から見れば、單純極る學生々活や、千や二千の端金を使つて道樂した經歷などを、物々しく書き立てられては、我慢にも手にする氣になれないではないか。吾輩は、何々協會とか何々座とか云ふ素人芝居の極端なる侮蔑家であると同時に、今日一般の小説家なる者に對しては、演伎座あたりの鈍帳役者に拂ふ程の敬意をも拂はない。

但し取除けはある。田山花袋の如きは其の一人である。彼れの努力精進と、之れより來る進歩とは、驚嘆の外はない。彼れは三四年前から、好んで花柳界に材料を求めて居るが、其の當初は、唯だ噴飯の外はなかつた。其の描く藝者は、眞面目腐つて人生觀などを説いたものだ。女學生の墮落したのだつて、んな野暮な者は、先づ少なからう。

『残る花』も、矢張り材料を花柳界に取つてある。花袋が、好んで花柳界の人物を描くに就いては、固より作家として、相當の主張があつてのことであらう。花柳界の事實を宜く知つて居るから、又此の社會に興味を有つて居るからと云ふやうな單純な理由からでないことを、吾輩は、信するのである。吾輩も亦た小説家が、花柳界に題材を求めるに就いては、一個の主張を有つて居る。併し其れは、今日の問題でない。『残る花』を讀んで、吾輩は、花袋の愛讀者以上 Admirer たることを辭せぬ。技巧も、愈々平淡の域に入つて來た。あゝいふ社會の人物の性格を、さながらに描いてある深刻な觀察は、敬服の外はない。

花袋は、モーパーッサンの崇拜者だと聞いて居る。單り花袋ばかりではない、一體に日本の文學者は、西洋の文學者から借りて來た哲學や人生觀照の方法などを、其儘直に彼等自身の取材に適用しやうとするのだから堪らない。

花袋は、今や此等の習癖から脱却して、彼自身の途を歩みつゝある。吾輩をして、自己の理想を、直に實行することを得せしめば、國家をして、相當の待遇を與へしむるものを、英國や佛國に見る如く。

四七

## 大谷光瑞

四八

西本願寺事件は、海軍收賄事件と共に、近時世間を騒がした重大なる、忌々しき問題であつた。そして其の中心人物は、例の大谷光瑞である。彼れは、問題の種子となり易い人物と見える。一昨年頃は、若い書生をして西蔵探検をさせたので、世上の評判となつて居たが、今年のは、問題が、世上の興味や人氣だけに止らずして、法主自身も退隱、辭爵せねばならぬ程の始末に立至つた。

光瑞を知れる者の傳ふる所

に依れば、彼れの性格の中に

は、偉大な、非凡な要素があ\*

も知れぬ。或は、偉大とか、非凡だとか云はれる要素は、法主であつたから、法主たるべき境遇に生れたから、之れを有するに至つたので、あれが貧乏な平民の家に生れて居たら、名も形も現はさずに終つたかも知れぬ。

それは兎も角、今日の彼れには、儘に偉い面白い所もあるだらう。併し吾輩は、此等の偉大にして妙味ある資質を確認しつつ、尙ほ且つ彼れの迷倒、非行を責めるのである。



\*るさうだ。其の爲す所を見れば

吾々にもさうだらうと思はれる

彼れが、政界や實業界に在つ

てそして特に子供の時から辛苦

して育つた男であつたならば、

或は頭抜けた仕事をして居たか

彼れが迷蒙の根本は、宗教の要諦を、形式的、外界的事業に在りと斷信して居ることである。彼れは、なまじ歐米などを見廻つて來た爲めに、其の社會的、慈善的各方面の華麗な宗教家の事業を、皮相的に觀て、噫、吾れ亦た日本最大宗派の法主である、其の爲す所は歐米人を凌ぐ可し、彼等の成し能はざる所を成す可し、佛教を以つて世界の宗教を統一す可しと思込んだ。

此の抱負は宜しい。問題は實行方法に在る。地獄の沙汰も金次第、衆生濟度には金を要する、先づ金を集めざる可からずと、彼れは叫んだのである。本願寺の傳來的方法を以つて盛んに金を集めた。そして湯水を撒く如く使ひ棄てた。慈善團體の基本金まで使つた。終には投機にも手を出した。何等の痴漢ぞ、論語讀みの論語知らず。歐米の宗教的事業の資金が如何にして集められるかを、博識なる西洋通の大谷光瑞は知らないのだ。

宗教的事業とは何だ、慈善事業とは何だ。内に信念の蓄ふる所なくして、外に宏大華麗の事業を起す、其の自ら欺くや、俗人も尙ほ愧づる所。宗教は人を濟へば足る。謂ふ所の人を濟ふとは、其の靈を濟ふのである。本立つて未成る。靈をだに濟は、生活上の諸般の問題は、自づから解決される。塔堂伽藍、校舎病院の建設、此等は固より末の末である。祖師親鸞上人に、何の寺院があつた、何の海外布教があつた。光瑞若し祖師の信仰の一端をだに汲み得ば、彼自身先づ自己を濟ふべきである。一身一家の始末だに成し得ずして、何が宗教の權威だ。革命の濤は、此の正統的宗派の奥堂に打ちかけた。吾等は是れを喜ぶ。此の意味に於いて、憐れむべき大谷光瑞も亦歴史上の意味ある一人である。(大正三年七月)



花井卓藏論



花井卓藏氏

## 花井卓藏論

政治家と職業、此の問題は永久の謎である。議會が開設されて、官吏を常職とするものよりも、民間の士の方が、寧ろより多く政治家の名を冒すやうになつて以來、愈々此の謎は解きにくくなつた。政治運動の爲めに先祖傳來の家産を消盡した人も多いが、是れは行き詰つた、不徹底な、自家撞着の方法である。天下國家の爲めに財産を消盡したと云へば、一寸崇高に聞えるけれども、實は政治の本義と相容れざる非理性的な行爲であつて、其の結果は、必ず本人の志を破壊することになる。政治家は富豪たるを要せないけれども、自ら相當の地位を保持するに必要な収入がなくてはならぬ。行住座臥、借金の始末に屈托してゐるやうでは、善い智慧の出るものではない。そして何事も専門的なるを要する現代に於いて、日夜企業、營利を是れ念とする商人や、田舎住居の農業家などに、専門中の専門

たる政治の分らう筈がない。然らば如何なる職業が、政治家に適當である歟。解きにくい謎である。

辯護士なる職業が発生して以來、天下の書生社會に革命的變動が起つた。帝國大學以外に、五大法律學校なるものが出來て、法律書生を養成したことは、二た昔も前からであつた。青年會館に於いて、錦輝館に於いて、圖書館に於いて、牛肉屋に於いて、其の顧客の多くを占め、又た最も幅を利かす者は法律書生であつた。彼等は生活費を得ると云ふ意味の職業として、辯護士を選んだのみならず、他日政治家となつて國政に參與すると云ふ觀念をも、慥に有つて居たのである。彼等の此の希望は、今日の書生の多數のやうに實業的ではなくして、政治的であつた。花井卓藏氏は彼等の先輩であつて、又た彼等の羨望を一身に聚めた成功者の隨一人である。

僕の郷友に關と云ふ辯護士志願の書生があつた。僕等が十七八の頃、彼れは夜店で買つた『新演説』と云ふ小冊子の中に在る花井氏の演説を僕に示した。演題は『契約論、國際條約の本質を論ず』と云つて、明治二十二年十月二十一日鷗遊館に於いて、當時世上の大問題となつた條約改正に反對して試みられた演説であつた。關は何時も下宿屋の窓に腰掛けて、演説口調で之れを朗讀した。僕も彼れの熱心な賞讃に促されて讀んで見た。是れ僅に二十二歳の青年の作である。僕は今讀み直して見て感心する如く、當時其の傑作に敬服してしまつた。其の頃から、二十一二を以つて男子事業を成す出發期なりと信じて居た僕は、此の二十二歳の雄辯家に對して、其の現存するが故に、歴史上のディズレリーやグラッドストーンに對するよりも、一層確實な興味を有つやうになつた。

現代の他の政治家の場合と同じやうに、僕が初めて花井氏を見たのは議會に於いてであつた。それは明治三十八年二月二十一日、第二十一議會も終りに近づい

て、所謂六三問題が本會議に上された時であつた。桂内閣の與黨たる政友會からは何等聴くべき賛成演説もなかつた。花井氏が何時ものやうに羽織袴で、反對演説を試むべく登壇した時、其の蒼い顔は、僕が今日までに見た彼れの顔のうちで一番嚴肅なものであつた。

彼れは幾分澁り勝ちな調子で初めた。『此問題は憲法上極めて重大なる問題であるが故に、私は頭痛峇々たるにも拘はらず』と言ひ出すと、議場にくすくすと笑聲が起つた。僕は今朝の新聞で、花井氏が他の議員と共に、大藏省から王子の醸造試験所に招待されて、痛飲同僚を驚かし、往來に倒れたと云ふ記事を読んだのを想ひ出した。更に注意深く彼れの顔を視ると、彼れは議場の笑聲に頓着なく、延びた頭髮を不揃ひに額に被せ、眼を閉ぢ、兩手を卓上に突いて、心持ち前かゝみになり、一層顔を嚴肅にして演説を續けて居た。

此の演説は、彼れの立場が黨情に制せられず、又た問題が其の得意とする所なので、固より傑作の一つであるとは言ふまでもない。政府黨からの妨害も尠かつた。

大正二年十月の末、僕は倫敦の田川大吉郎氏から、亦樂會、政友俱樂部合同計畫に關する手紙を受取つた。田川氏のことであるから、口づから語る如く、痒い處に手の届くやうに精詳に認めてあつた。中に、先づ花井君の意嚮を叩く必要があるが、君では一寸打解けにくからう、猪股君を遣れと書いてあつた。

尾崎氏は此の計畫遂行の爲めに、自ら花井氏を訪はれた。花井氏は吾々の豫期以上の熱心を以つて活動を始めた。此の運動は意外に早く新聞に洩れた。成否に就いて、些からず疑悞を懷いて居たにも拘はらず、其年の十二月十一日、尾崎氏の二男が逝去した翌日、花井氏は亦樂會員の殆んど全部承諾の報知を、品川の尾崎邸に齎した。彼れは文句云ひさうな顔振れから、先づ交渉を始めると云ふ方策を執つたのであつた。

次の議會で中正會は目覺しい働きをした。花井氏は尾崎氏に次ぐ鬪將として、常に重要な部分を働いた。シーメンス事件が豫算委員會の問題となつて、天下の視聽を聳動した後、是れが初めて本會議で緊張せる質問戰の主題となつた時、其の緊急動議の提出者は花井氏であつた。「國格に關する事件であるが故に」と云ふ彼れの嶄新な熟語は、特に僕の注意を牽いた。

大隈内閣組織の際、花井氏は入閣するだらうと傳へられた。愈々閣員の顔振れの確定した晩、即ち四月十五日の夜、大隈邸で尾崎氏が伯爵に向つて、強く花井氏を推薦し、中正會の要求としてまでも、其の入閣を要請したことは、僕自身も具さに與り聞いて居る。彼れの入閣不可能となつたのは、他の事情よりも主として内閣組織計畫の根蒂たる同志會と中正會との勢力の對抗状態に原因する。言葉を換へて云ふならば、閣員選擇の全權を把握した加藤男爵の意圖に基くのである。花井氏はまだ大臣の貫目が乏しいからと言ふ者があるならば、僕は言者の官僚思

想に驚くと直言したい。長き官歴ある者でなければ、大臣たるの貫録がないと言ふ者は、猶太種族出の商人デルンブルヒを植民大臣に簡拔したカイゼルの英明と、之れを異しまぬ獨逸の進歩とを知らぬ舊式な頭腦の所有者である。また手近い事由がある。議院政治、政黨主義旺盛の今日、二十年に近き議院生活に於いて、あれだけの成功を贏ち得た花井氏には大臣の資格がなく、殆んど同じ年數を官吏生活にのみ過した官僚の成功者には之ありと做す思想は、抑も如何なる者である歟。固より實行さるべきことゝも思はぬが、序でなれば申して置く。僕の所信に隨へば、大隈内閣は解散前と後とに於いて、其の性質の上に異常の變化を來たした。解散前には、少數黨を基礎とする内閣であつた。立憲政治の嚴密な主義から言へば、存立の資格なき内閣であつた。總選舉後には、彼れが如き大多數を占めた。存立の實力と資格とを有する内閣となつた。切り詰めて言へば、大隈内閣は純乎たる政黨内閣となつた。そこで内閣が、之れなくしては過半數を占め得ざる中正

會は、更に一人を入閣せしめるの要求を爲し得る地步を占むるに至つた。是れが代表政治の原則である。此の原則に依れば、花井氏は當然入閣すべき人である。大臣の椅子には限りがある、若し花井氏が入閣するとして、何人を辭職せしむべきかと云ふ問題は、此の原則に照して見れば、直に明白となる。併し日本の政界は、世界の如何なる立憲國よりも情實を道理の上に置く習慣が多いから、到底斯の如き議論は顧みられる筈がない。

總選舉後の臨時議會で、花井氏は副議長として、前例なき成功を博する機會に遭遇した。島田議長が反對黨の不法な揚足取りと攻撃とに困惑してゐる時、花井氏は極つて聲譽を揚げる境地に立つた。花井氏は議院の規則典例に通曉することを得意とする人である。大岡育造氏が議長の時、議事規則に關して議場が騷擾し始めると、反對派であるにも拘はらず、必ず花井氏の援助を求めるのが常であつ

た。花井副議長の臨時議會に於ける成功は、あのやうな機會に遭遇した點に於いては幸運であるが、其の機會を活用したことは、儘に此の能所の發揮であつた。

第三十一議會であつたと記憶する。政友會から那古浦丸救済に關する法律案が提出された。當時政友會は絶對過半数を制して居り、且つ問題が大したものでもなかつたので、別に反對黨からの異論もなく、何人も直に可決さるべく豫期して居た。將に決せんとする其刹那、花井氏は持前の幅のある聲で議長と呼んで起つた。異議の要點は、斯の如き法案は、憲法に規定されたる立法事項十二箇條の孰れにも該當せぬと云ふに在つた。夏の冬よりも暑きが如く、明白を極めた議論であつた。多数決を漫性的政略とする政友會も、反對のしやうがなかつた。大狼狽へに狼狽へて、幹部は此の請願を委員に附託すべく提議した。委員會では、儘か握り潰しになつたと記憶する。

花井氏の辯説は、彼れの人物論に於いて、最も重要な部分を占むべき價值を有する。吾々が古風な文章體に比して、今の言文一致體を選むのは、移して直に演説とし、談話とすることが出来るのが、其の主な理由の一つである。同時に又た今日の日本人の演説、談話が、餘りに文章を遠ざかれる冗長蕪雜のものであるのに嫌らず思ふ。文を言に引下ろすことも必要であるが、目下の有様では、言を文に引上げることが、更に一層必要である。花井氏の演説は、文脈、用語に於いて、文章的に過ぐる程漢文素が勝つて居る。議院の演説家中彼れの演説は、一番俗語に遠い修辭に満ちて居る。時とすると唐宋大家の文章を読むやうな感じのある傑作に接することがある。一昨年の夏であつた、田川大吉郎氏が洋行前、自ら知友を招いて、離宴を三緣亭に開いたことがあつた。其の席で花井氏が試みた送辭は僕が聞いた彼れの演説中、最も氣の利いた、感じの好い、そして結構と修辭との妙を極めたものであつた。

『田川君足下、足下が近く歐米漫遊の途に上らんとして、自ら今夕此の宴を開き敢て一人の閣下を招かずして、悉く足下を招かれたることを、田川君足下の人格主張に照して、私は特に愉快とするものであります』と云ふのが、其の冒頭であつた。僕は此の演説を聽いて、韓愈の答李秀才書を読む心持がした。

氏の音量、音調は、彼れの雄辯を今日の價値あらしめた重要な要素となつて居る。僕は世間普通の批評家と見を異にして、犬養氏や大岡氏のやうな甲の勝つた音聲を取らない。議院生活の經驗ある政客のうちで、僕は望月小太郎、藏原惟郭兩氏を音量、音調の最も優れた演説家とする。兩氏共に聲の使ひ方が下手である爲めに、些し氣が乗つて來ると、十二分に聲を出さうとするから、直ぐに調子が割れて、其の當然現し得べき效果の大半を空にしてしまふが、日本人としては珍らしい程量あり、幅あり、又た音樂的な聲である。花井氏の音聲は、幅に於いて、量に於いて、別けて其の鏘ある點に於いて、僕の選む條件に近い。彼れの音量は左

程大でないけれども、多年鍛へ上げただけに、低聲でも宜く徹る強味がある。上から上から聲を出さうとするのは、初歩の聲音樂者である。一番低い調子で宜く徹るやうになれば、それは腹が出来たのである。僕は花井氏の音聲を聞く毎に、經驗の價値を思ふ。

雄辯は政治家に缺くべからざる武器である。寧ろ無くてならぬ資格の一つである。併し其の武器、其の資格は、宛かも古の武士の槍劍に於けるが如く、今の軍人の銃砲に於けるが如きものである。如何に槍劍銃砲の技に秀で、居たからとて、其れが將に將たるの資格を具備したものと申されぬ。同じ意味に於いて、如何に雄辯家であつても、其の事が直に大政治家の資質の全部なりとは認められぬ。のみならず、雄辯の一時的な、演劇的な効果を重んじ過ぎる爲めに、却て政治家たるべき他の遙に緊要な資格を等閑にすることが多い。古今の大雄辯家が、大政

治家としての用意に缺くる所の多いのは、是れが爲めである。

先頃國務卿を罷めたブライアン氏の如き、其の顯著な一例である。彼れは年齒僅に三十七で、一場の演説に依つて、大統領候補者に推された。此の一事、彼れが生涯の行徑を豫示して居る。彼れは其の雄辯に依つて、今日の地位を占めた。其の品性の高潔なる、將た所信に忠なる、以つて牧師たるに十分である。強ひて政治家の部類に入れんとするならば、驅引と煽動とに馴れた黨人と云ふに過ぎない。先年彼れが我國に來朝した時、丁度鐵道國有が實施された。是れを目撃したブライアン氏は、歸國後あの民業主義の本場たる米國に於いて、鐵道國有の必要を叫んだ。彼れが先頃まで銀貨本位論の首唱者であつたことは、天下公知の事柄である。此の二事、以つて彼れの政治家的資質の分量を測るに足るのである。今度の對獨通牒に關して辭職したのも、寔に彼れとしてありさうなことだ。然り彼れが如き雄辯家としてありさうなことだ。



一體米國人は世界第一の演説好きの國民である。唯だ一回の演説の成功に依つて、人物の價値を定める習慣がある。是れは米國人の特色であるが、決して褒むべき特色でない。ブライアン氏は、此の特色に依つて成功を與へられ、又た此の同じ特色に依つて失敗せしめられた。

日本の議會では、總選舉毎に辯護士の増加する傾向がある。議院政治に於いて法律知識は政治家の第一資格であるから、是れ寔に喜ぶべき現象である。そして能辯家も辯護士に多い。併し彼等のうちに、比較的政治家らしき者幾人ありや。他の職業の議員に比して、寧ろ政治家らしからざる者多しと云つても、公平なる批評家は必ず許すであらう。彼等が常に張膽明目して争ふ所は、單なる議事規則の見解に就いてははない歟。僕は辯護士の素養は、政治家の素養に非すと斷定する。孫子に『上兵伐謀』と云ふ句がある。接戦に先つて、敵の謀を伐つは、兵の上乗なるものである。常山紀談に在る『謙信松山城後卷の事』の一項を茲に引用するは

此の場合ふさはしからぬことでもなからう。

永祿五年三月、北條氏康父子、武田信玄父子、數萬の兵を以て、武州松山の城を圍まるゝと聞き、謙信八千の兵をもて、後卷きせられしが、十五日厩橋に著陣あれば、城落ちけると聞えければ、されば是れより、山の根の城へ押寄せ打破るべし。敵後詰めするならば、北條武田父子四將の大軍に打合せて、軍せんこと最も望む所なれと、云ふより早く刀根川を打渡り、架けたる船橋を切り流させ、山の根の城に押寄せ忽ち攻め落し、小田助三郎を始めとして、皆撫で切りにしてけり。かくて使を四將の陣に遣りて、松山の城に向はれ候ふ由を承り、出向ひ候ふに、城早く攻め取られ、軍仕ることなくて、弓箭の禮儀に背きて候。只今山の根の城を攻め候ふ程に、後卷きや仕り候へと云ひ送られしかば、氏康懸りて軍せんとす。信玄の曰く、今勝ちたりとも、謙信には四人して勝ちたりと人に誹られんこと口惜しきとて、強ひて留めてさて止みけり。信玄實は然ら

六八  
す。日比謙信の勇氣倍々にても戦ひ難きに、松山の城落ちて、怒りを含みたれば其の鋒に對ひがたく、虎を恐るゝが如くなりし故とぞ。

又一説に、此時信玄兵を進め、太鼓を鳴らし、軍威儼然たり。越後の軍兵も物の具し、早や打向はんとせしを、謙信いやしく信玄かゝり來るに非ず、引き取らん爲めなり。馬の鞍をおろし、甲冑を脱いで休息すべしと云はれしが、果して信玄引き返へされたりと云へり。

孰れを勝り、孰れを劣れりと云ふに非ず。兩雄の對陣ぶり、眞に將帥の機略を示して餘りがある。槍劍銃砲の徒の窺ひ得る所でない。先頃聯合内閣を造つたアイクスイス内閣幹部の遺口には、云ひ知れぬ妙味のあることを茲に附け加へて置きたい。

花井博士は辯護士として、既に我國有数の成功者となつた。議院に於いても、

顯赫なる聲名を馳せた。二十歳にして辯護士となり、三十にして代議士となり、四十にして大臣となるは、彼れが少年時代からの志望であると云ふ噂もある。眞偽は固より知る所でないが、氏の志、政治家たるに在るは疑ひを容れない。それは兎に角、此の二三年來、彼れは著しく政治家的色彩を濃厚ならしめたやうだ。其の政治思想の傾向に就いては、同じ難き節も多々あるけれども、彼れの理義に終始した經歷は、僕のもととして措かざる所である。政友會に行かず、國民黨に入らず、既成政黨の圏外に、獨自一己を樹立し來つた彼れの過去は、是れから生るべき新しき政黨の前驅であつた。彼れの慣用語たる一人一黨主義は、政治的には勿論、字義的にすら、僕の無意義とする所であるけれども、彼れが他の有名な政治家の如く、既成政黨の惰性、形式に囚はれなかつた點は、其の見識と強味とを見らるべきである。

人間の事業は、其の天分、努力、年齢を要素として成る。單に年齢のみに就い

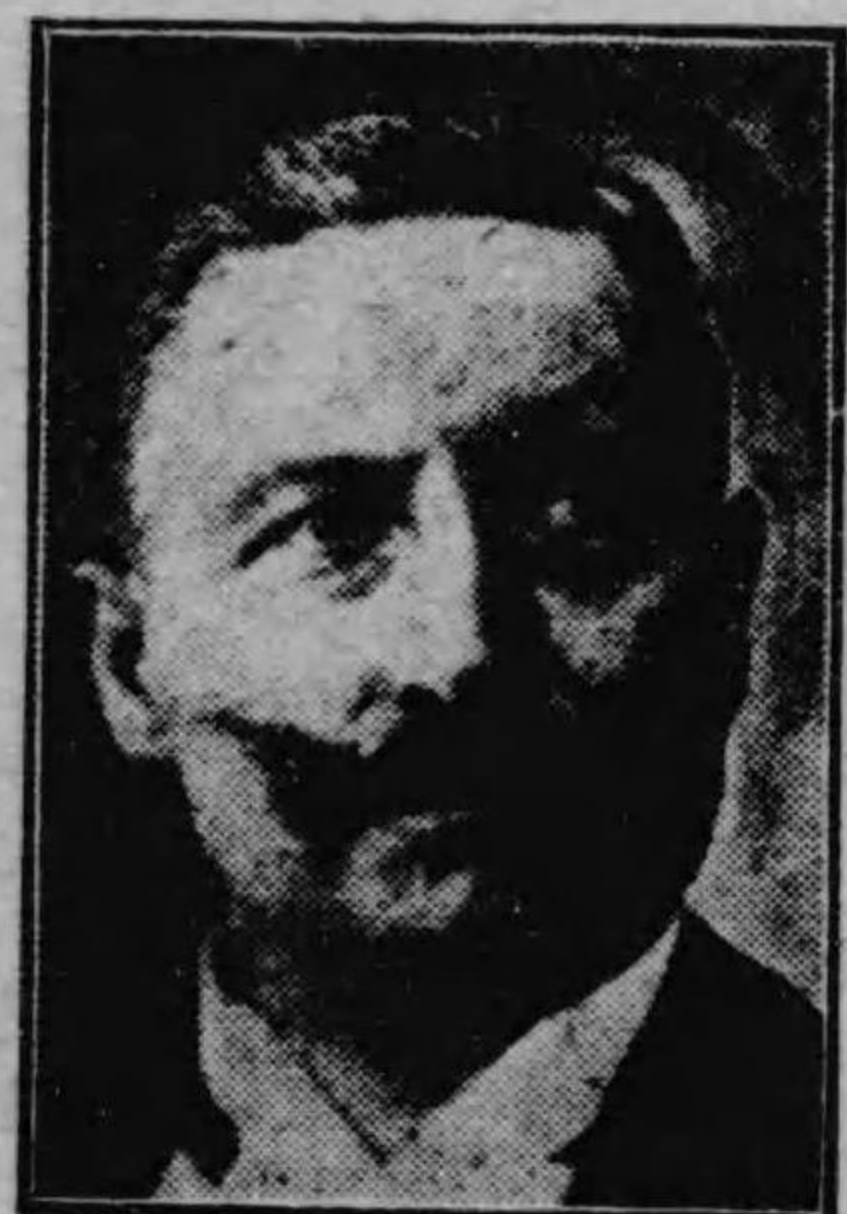
ても、興味ある事實が擧げられる。第一流の政治家の中で、加藤男は五十六、尾崎氏は五十七、原氏は六十、犬養氏、武富氏共に六十一、年少者と年長者との間が僅に五箇年である。然るに此の一兩年來、議會で能力、材幹を現はし來つた二流の士を見るに、前の第一流政治家より、概ね一時代か一廻り若い人々である。先づ花井氏は四十八、早速氏も四十八、田川氏四十七、床次竹次郎氏四十九、關和知氏四十六、新議員ではあるが、政治的材幹は從來知れ渡つて居た濱口、下岡兩氏は孰れも四十六である。時代は變つた、時代と共に人も變つて行く。今の時代は明治初年頃に生れた人々の活躍すべき時代であらう。政治は何物よりも人物を中心として動く。僕は儕輩に秀でた花井氏の前途に、格段の興味を繋ぐ。

——大正四年六月廿二日——

## カイゼル

七二

目下獨逸皇帝は、古來千萬人の一人が、僅に有する異常な心理作用を経験しつつある。アレキサンドル大王や、シーザーや、フレデリック大王や、近くはナポレオンの、一生に一度あるかないかの経験を経験しつつある。今度の戦争に勝てば、カイゼルは、極盛期のフレデリック大王ともナポレオンともなれるが、敗れば、其の極盛時代を夢想しただけで、一足飛びに、ウオーターloo戦敗後のナポレオンとならねばならぬ。而して今日の所、獨逸の旗色、甚だ宜しくない。鼻負\*だ。御心の程、思ひやられる次第である。



\*目でなしに、どうも形勢は、協商側に利あつて、同盟側に不利である。獨逸皇帝は、無類の自信力を有つて居られる方ではあるが、又た聰明慧智な人だけに、刻下の状態を、具さに呑込んで居られる筈

獨逸は、ホーヘンツォルレン家の創造であつて、實に劍に依つて造られたのだ。ホーヘンツォルレン家の人々は、何れも軍隊製造の爲めに、其の精力と金力とを費した軍人であつた。國家の傳來的政策は、軍國主義に依つて、國を治めることである。仲裁々判の制度が出来、海牙の平和會議が年々開かれるやうになつても此の傳來的政策は放棄されぬ。實に此の政策は、ホーヘンツォルレン家の歴史及び近世獨逸の歴史

史に取つての結目である。

吾々は、今此の政策の是非を言ふのではない。但だ此の政策あるが故に、歐洲政治家の夢平かなるを得ず、眞にはモロッコ問題で火蓋を切らんとし、今復た此の動亂を惹起するに至つたことを認めざるを得ないのである。

獨逸の尻推が強くなければ、奥國は、皇儲の横死に當つて、塞比亞に向つて、あんな極端な態度を取るものでない。あらゆる機會を利用しては已まないカイゼルは、此の皇儲の横死をも、等閑には見逃さなかつた。而して此の際に於けるカイゼルの打算の中に、露國の決意が、斯くまで堅固であらうと云ふ計測が餘り少な過ぎた。英雄遺算あり。自己を過大に英雄視したカイゼルは、自信力餘りあるが故に、今回の苦境に陥つた。

吾々は、希望を述べること止めて、想像を逞しうしたい。敵は名にし負ふ英國の海軍と、露西亞の陸軍とである。佛國亦た侮り易からず。げに佛蘭西に取つては、千載一遇の好機である。英露の援助を俟つて、臥薪嘗膽、四十四年の恨みを報するは、唯だ此の時である。

今日の戦争に於いて、千八百十四年や千八百七十年の戦争と、同一の結果を豫想することは出来ぬ。恐らく三箇月とは續くまい。城下の盟も望めまい。併し歐洲の均勢は、大に變るであらう。否世界の權力均勢が、大に變るであらう。歴代興味ある人物を出したホーヘンツォルレン家の當主は、面白き人ではある。現代の世界に於いて、最も面白き技藝を演ずべく生れたのが、彼れの運命である。世界は、此人あるが故に、幾多の苦痛なる興味も嘗め得られるのだ。

——大正三年八月——

## 常陸山

七四

常陸山谷右衛門は退隠した。寔に功成り名遂げて身退いたものである。彼れと同型の人物であるルーズヴェルトは、近頃歐洲から歸るや否や、船から降りる間も待たず、新聞記者に向つて、現政府の外交攻撃意見を發表した。實際政治が忙しいからと云つて、過去五年間干渉して居たアウトロックの記者をも辭した。政治家と力士とは、活動の年齢に相違はあるが、ルーズヴェルトは、未だ中々功成り名遂げて身退きさうに見えぬ。將來に尠からざる危懼がないでもない。\*



\*現代人の記憶では、常陸山程の名力士は、先づ他に無いと云つて宜い。彼れと横綱を競つた者に梅ヶ谷あり、強味に於いて優り、勝つた成績に於いて優つて居る太刀山ありと雖も、人物に於いては、

常陸山の足下にも寄れぬ。人物が勝れて居ると云ふのは、常陸山が政治家的であるとか、理窟が達者だとか云ふのではない。相撲道の自覺と、此の自覺を實現す可く努力した分量とを云ふのである。

相撲界近代の名人としては、今の雷などは筆頭に數へらる可き人だが、常陸山は力士としての力量以外力士を世間化した點に於いて、唯だ一人の殊勳者である。世間化すると謂ふのは、俗化するの意味でない。世間並以下と相場の極つて居た力士の人格を引上げて、力士と雖も世間一般に通用する位の人格ある者だ

と云ふことを、事實に於いて天下に示したことを指すのである。

中途で病死した爲め、功を全うすることは出来なかつたが、川上音次郎の新派劇に於ける地位も、之れと相似たものであつた。川上も、あれで初めは役者として上手な方であつたさうだ。舞臺を退く前頃は、もう藝が荒んでしまつて居た。俳優として、豊かな天分を有つて居るかどうかい、疑問とさへなつて居た。乃ち技藝に於いて優つて居るものは、他に數少くはなかつたが、新派劇を今日あるものにした殊勳、新派劇團全體を引廻す統轄力に至つては、他の何人も、彼れに比肩し得る者はなかつた。今でもない。

常陸山は今年四十一である。雷は四十五まで土俵を勤めて、立派な成績を贏ち得たものだ。常陸山の氣力體格、力量から見れば、餘り衰へ方が早過ぎるやうだ。是れには種々な原因もあるだらうが、吾輩は、彼れが人一倍金に苦勞する人であることを、主な原因に數へて置く。彼れには、莫大な借金がある。彼れは性格として、金を使はずに、あれだけの仕事を成し得ない人である。金を使ふ點に於いて、力士中、唯だ一人の事業家的な男である、政治家的な男である。眞眞客から貰つた祝儀を貯蓄するやうな、膽玉の小さい男でない。それだけ彼れは、金策に苦勞しつゝある。川上も同様に金に苦勞して、藝が荒んだ。藝術家と金、貧乏した爲めに、大篇傑作を後世に遺し得た詩人文士もあると聞くが、大抵の者は、貧乏に壓せられてしまふ。金に苦勞する性質の常陸山は、一個の力士たるよりも、より多く相撲道の事業家に適して居る。

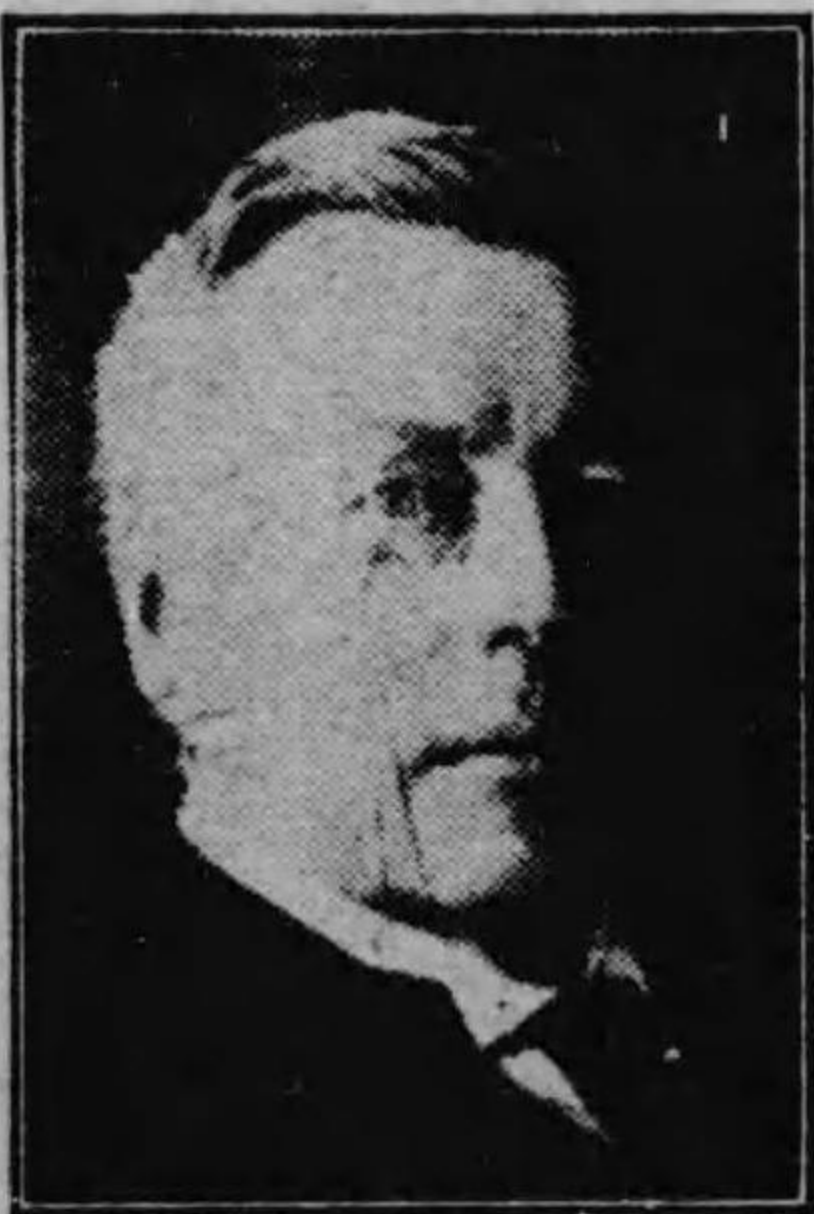
—大正三年八月—

七五

## チエムバーレーン

老チエムバーレーンは死んだ。此の現代に於いて最も偉大なる世界的政治家の死は、單に英國の損失のみでない、全世界の一統に悲む可き一大出来事である。併し最早彼の死は、eventであつて、newsでない。彼は、八年前全然政界から退隱した癡人であつた。

チエムバーレーンの特色は世間から色々に批評される點に在る。彼れの死が傳はるや、英國は勿論、世界の新聞雑誌は、紙面の大部分を割いて、彼れに關する記事を掲げた。倫敦のデー



リー・スケッチは、チエムバーレーン號とも云ふ可きものを發行して、全紙を彼れの記事で埋めた。そして劈頭に『最も愛せられ、而して最も嫌はれたる人』と題してあつた。是れも彼れの顯著なる特色の一つであらう。

彼れの性格及び政治的經歷の中で、主なる缺點として、政敵の擧つて指摘したのは、變説と矛盾とであつた。如何にも彼れの生涯には變説と見るべき行爲が一再ならずあつた。自由黨(急進的)から保守黨に轉じたなぞは、實に其の甚しき一例で、世間をしてあつと云はしめた。ヂヤスチン・マツカーシーなどは、其の著『現代英國の大政治家』の中で、チエムバーレーンの此の行爲に言及して、全く解す可からざる奇蹟だと評して居る。

併し友人側にはせると、相當の辯解は固よりある。彼れは、幾度か意見を變へた。境遇の變するに連れて、其の意見を變へた。けれども意見は如何に變ずるとも、彼れの眼中常に高大にして、而かも實行さるべき國家的政策の觀念を失はなかつた。此の強盛なる信念の發露し、向上する結果が、偶ま政敵から、

矛盾なり、變説なりと攻撃される點である、と辯護して居る。

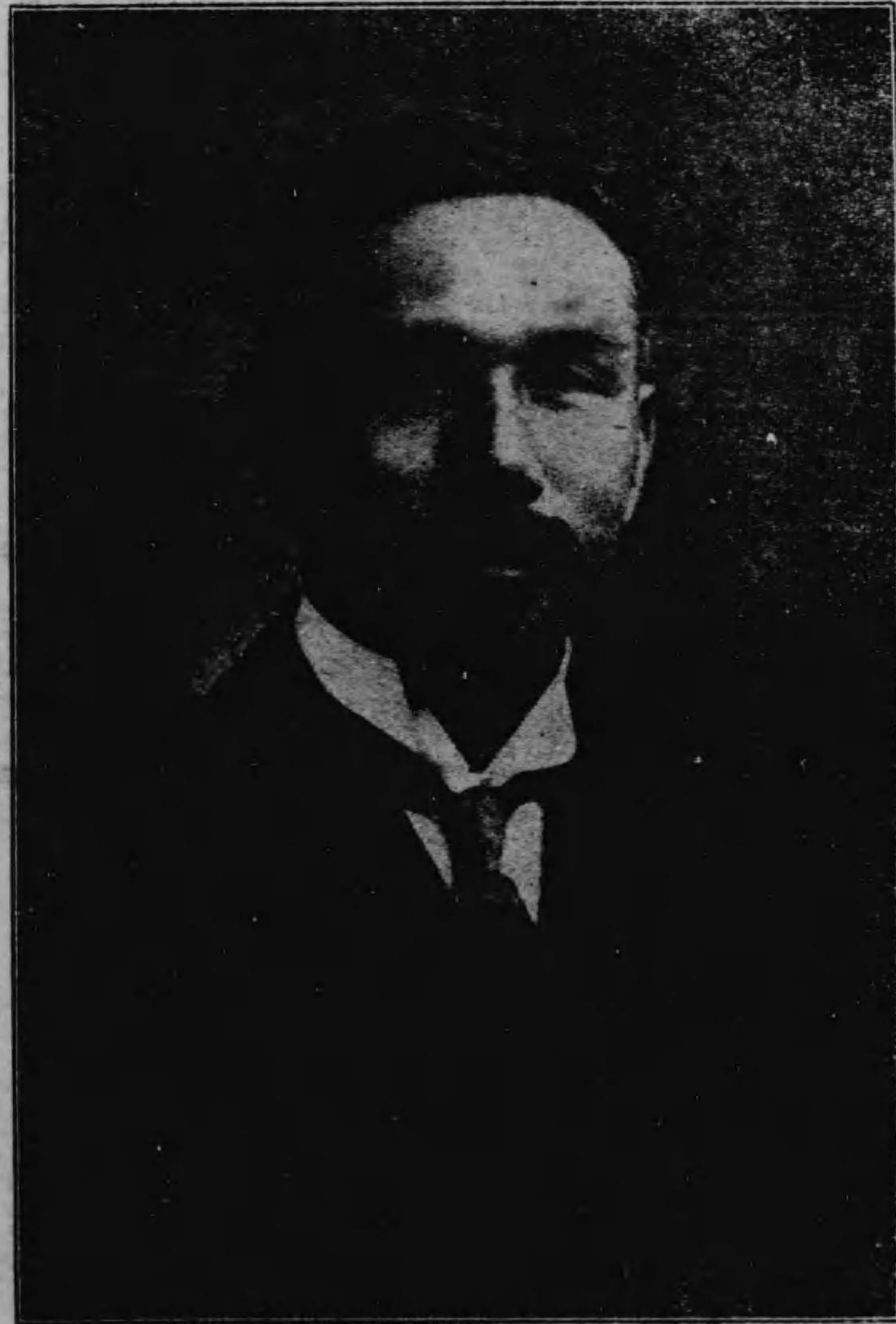
眞理は、敵の中にもあれば、味方の中にもある。但だ吾輩は、チエムバーレーンの特長の全斑を盡すものなりとして、此の一事を指摘したい。彼れは、最も偉大なる空想を、最も偉大なる實行力を以つて、實現し、又た實現せんとした人であると、云ふ一事である。

單に實行力の點から云へば、ロイド・ヂョージは、チエムバーレーンの下に在る者ではない。併し大なる空想家たる點に於いては、空想とも見える程の偉大にして、革命的な案を立てる點に於いては、彼此同日の談でない。世間に空想家は澤山居る。チエムバーレーン以上の空想家は、數へ切れない程澤山居るが、實行力が伴はぬ。單に實行力のみから云つても、彼れは、眞に世界の驚異である。況んや彼れの實行力は單純な實務家の實行力に非ずして、一代の氣運を轉廻し、國民の生活を、根本的に變改する突飛に近き想像力、立案力の伴ふものであるに至つては、人間の併せ有し難き二要素を、一人にして有せる偉人ではないか。超人類的な偉人は、其の偉大さが大きければ大きい程、此の二要素が大きくして、且つ並立したものである。ナポレオンもさうであつた、アレキサンドルもさうであつた。是れは一見矛盾なるが如くして實は極めて論理的である。

吾輩は、チエムバーレーン第二の特色として、彼れが中年政治家であることを擧げ度い。螺旋製造の商人上りである彼れは、ふしパーミンガム市長として有名であつたにせよ、四十一で初めて議會に入つた。英國の政治家としては、甚しく晩れたものである。併し彼れの議會に於ける活動は、目覺しいものであつた。植民大臣となつてからは、眞に英國政界の第一人者で、對内的にも、對外的にも、當時の内閣を代表し、其の大黒柱たる者は、首相のバルフォアに非ずして實に彼れであつた。

——大正三年八月——

田川大吉郎論



田川大吉郎氏

## 田川大吉郎論

田川大吉郎氏の名が、初めて或る意味を以つて、僕に印象したのは、もう十五年も前、故田中正造翁の口からであつた。其の頃僕は、演説を聴くのを日課のやうにして居た。中にも毎土曜の夜、青年會館で催された毎日新聞社の演説會には、殆んど毎會缺かしたことはなかつた。儘か其の演説會に於いてはあつた、田中翁が例の鑛毒問題に就いて、口を極めて、田川氏を罵つたことがあつた。田中翁のことであるから、其の罵り方が並大抵ではなかつた。當時僕は、田中翁の崇拜者であつたから、田川氏との間の意見の相違は分らなかつたが、直ぐに翁の熱罵熱嘲に加擔して、田川と云ふ奴は、實に悪い奴だと思ひ込んでしまつた。

其の後三四年を経た明治三十六七年の頃、『逐鹿記』なる小冊子が出版された。



著者田川氏が、衆議院議員の選挙を争つて失敗した率直な経験談と、日本の選挙界の腐敗や、國民の政治思想の低級なことの熱烈な憤慨談を記したものである。僕は此の本を讀んで、田川氏が、僕と郷國相近き長崎縣の人で、極めて眞面目な性質の、決して曩に思ひ極めたやうな悪い奴ではないと思つた。そして當時何事にも、悲憤慷慨する癖のあつた僕は、田川氏の落選に同情して、是れ失敗に非ず、名譽の失敗也、寧ろ勝利なりと叫んだ。

それから間もなく、僕は都新聞の社説『一事一言』の筆者が、田川氏であることを知つた。其頃の『一事一言』は、今日のやうに、言文一致體ではなかつたが、簡潔素朴、飾らず、作らず、淡々たる中に、言ひ知れぬ巧みを藏してあつた。當時僕は、文章では、徳富蘇峰氏の崇拜家で、又た門下生であつたにも拘はらず、此の非民友社的な、非技巧な文章に感心してしまつた。嘗に文章ばかりでない、論旨にも、思想の傾向にも、殊に短い文章の中に、豊富な意味を含ませて、日々

數多の事項に互つて論評を試みる趣味の多方面なものと、觀察眼の鋭利なものには、全く敬服してしまつた。

中央公論を初め其他の雑誌で、氏の文章を見ることは尠くなかつたが、要するに、『一事一言』の愛讀者たることに依つて、僕の田川論は、略極つて居た。氏が明治四十一年の總選挙に當選してから、僕は、初めてあの取繕はない、病人らしい、併し哲學者的な、何處となく深刻な味のある容貌を、議院に於いて、初めて見た。僕は、特殊の意味を以つて、絶えず氏に注意を怠らなかつたが、思慮に饒んだ彼れは、自己を試みる前に、議院の研究を勉めて居たのであらうか、僕は、今日想ひ起す可き彼れの言動の何物をも記憶しない。

其の後四十三年頃の議會であつたらうか。陸軍省の政府委員に對して、食糧問題に關する質問を試みたことがある。一般の議員に宜くある攻撃的な、追及的な

質問振りでは勿論なかつたが、抜き挿しならぬやうな適切なものであつた。政府委員は、不安な顔付で、怖々答辯した。恰も彼れ自身、自分の答辯を危んでるやうであつた。僕は、流石に田川氏だと思つた。

是れ、僕が受けた、議院に於ける氏の言動の最初の印象である。

大正元年十一月の中ば、東京市役所の第三部長室で、初めてお目にかゝつた。特に記して置く、紹介者は、尾崎行雄氏であつた。僕は、氏の意見を雑誌に書く目的で面會を求めたのであるから、劈頭先づ何か問題はありませんかと訊いた。僕の問ひは、甚だ平凡であつたが、氏の答へは、極めて非凡であつた。曰く、大問題と云ふものは、さういつももあるものぢやないよと。世間では、こんなのを、無愛想だと云ふ、皮肉だと云ふ。唯だこれだけ書くと、僕は二の句を繼げなかつた筈であるが、當時僕は、何と云つて是れに對したか、今は記録して居ないけれ

ども、本題に進むに左程困難も覺えなかつたやうだ。併し十分間ばかりして歸る時には、僕は、決して氏の崇拜者ではなかつた。是れは、一年九箇月後の今日、尙ほ明瞭に記憶する確實な一事である。

其の後數日を経て、氏は態々門下生の一人をして、僕に一文を届けしめた。世界雑誌の昨年 of 新年號に出て居る『西園寺内閣の弱點』と題するのが、其れである。此の一文は、僕に取つて、忘れ難き、意味深きものである。氏と僕との今日の干繋は、實に此の文に始まると云ふも差支へはない。

爾來每號氏の手記に成る文章は、世界雑誌に掲載された。單調なる、政派に偏するが故に殊に單調なる世界雑誌に於いては、氏の文章は、寔に異色であつた。取分けあの大文章『思ふ所を直抒せば』の如きは、同志者中に物論をさへ醸した。併し僕は、殊更らにあの名文を稱揚して、其號の呼物とした。

暮に迫つて、憲政擁護運動が起つた。僕等は、憲政擁護會以外に、純粹な青年團體を拵へるの必要があると云ふので、月の十三日、憲政作振會なるものを組織した。發起者の多数が、田川氏の門下生であつたことも不思議であつた。其の干繋から、同じ月の十八日、擁護會よりも先きに演説會を開かねば面白くないと云つて開催した青年會館の演説會には、田川氏も出席された。『民を重んずるの心』と云ふ演説で、僕が聞いた氏の演説中、二位に下らぬ出来であつた。

政界は、限りなき波瀾を捲起した。西園寺内閣が倒れて、内閣組織のお鉢を、あつちこつちに持廻つた揚句、二十一日に桂内閣が組織された時、憲政擁護運動の火の手は、天に冲するの勢ひを呈した。越えて翌年一月廿一日、桂公が新政黨組織を發表するに至つて、狂熱に充ち満ちた政界は、新たに好奇心と不安とが加つて、更に複雑に展進した。

當時の田川氏の政治的立場は、色々の風評を惹起し易いものであつた。氏は、國民黨の創立者の一人で、而かも此の黨を棄てた人である。政友會には、議院に入つた初めから、同情の眼を向けなかつた。常に公然其の黨弊を指摘した。而して絶えず、新政黨造らざる可からずと叫ぶ人であつた。

桂公との交際が、何時頃から始まつたのか、僕の知る所でない。が、僕は、氏から直接桂公賞讃の辭を幾度びか聞いた。實際偉いよ、現代政界の掘出し物だよ、大に行らせて見たいものだ、と云ふやうなことを聞いたのは、一度や二度でなかつた。併し僕は、田川氏に多大の價値を認めながら、此等の言には、些の價値をも置かなかつた。

吾々の干繋は、單に思想の交換に止らなかつた。僕は、自分の雜誌に、只で氏の原稿を頂戴して満足する程、無慾になり得なかつた。一度長時間、政友會入會を勧めて、随分込み入つた意見を闘はしたこともあつた。

桂内閣は、首尾宜く倒したが、後繼内閣の組織者が山本伯であつた時、僕は、田川氏に對して面目ない氣がしてならなかつた。政友會滅亡史論や政友會罪惡史を書き、又た一週間に二回宛市内に憲政擁護巡迴演說會を開いて、焦慮痛憤を極めて居る時、田川氏は、悠々逼らざるの態度を以つて、『政友會側面觀』を寄せて、冷靜に、理性的に、且つ精密に、吾等の政友會攻撃に加擔された。

當時僕は、初戀の青年が、戀人を思ふの熱心を以つて、昔の武士が、諸國を武者修業して、親の仇を尋ね歩く激烈な復讐心を以つて、日夜政友會——山本内閣破壊に肝膽を砕いて居た。思案にあぐねては、三日置き位には田川氏を訪ねて相談した。田川氏にも、之れぞと云ふ名案のある可き筈はなかつた。氏の談話は、概ね政友會の功罪の批評、新たに起る可き政黨の旗幟、性質等に關するものであつた。

此の頃僕は、田川氏に對して、第二の野心を抱くやうになつた。前には、政友會入會を勧めたが、今度は政友俱樂部に入られるやうにと懇願した。それは、尾崎氏の幕僚には、必ず田川氏なかるべからずと確信したからである。此の勧誘には、氏も大分困惑して居られた。何事にも、議論あり、見解あり、而して是れを述ぶるにあの能辯を以つてせられる氏も、此の場合には、大抵無言で苦笑して居られた。

昨年五月の初めであつた。一日不圖一案が、僕の腦裡に浮んだ。自分は獨り椅子に倚りながら、心の底で名案と叫びながら、衷心の歡喜を抑へ得なかつた。案の内容は、若し是れに所謂非政友合同の名稱を附するならば、固より政界の常套事で、蘇張の合從連衡よりも、陳腐なものである。但だ僕には、天來の福音であつた。行く可き道筋、選ぶ可き接觸者も、明かに見當が付いた。首領の尾崎氏

が、僅々三箇月前、桂公に抛つた弾効の爆烈弾、眼孔豆よりも小さい政客の無責任なる批評、陋劣なる讒誣、空なる文字と、死骸の如き類型的思想に囚はれたる舊式の名分論、此等のものが作り出す一大難關を、眼前に描き出した時、僕は、自信力ある勇將の出陣の曉に於ける意氣を以つて、武者振ひしつゝ立上つた。先づ田川氏に駆け著けた。『君の考慮茲に到つたか』と、氏は、歡喜に眼を光らせつゝ、堅く僕の手を握つた。

絶えて久しき、尾崎、田川兩氏の會見があつた。

僕は興味の頂點に立つて、火の如き活動を續けた。

田川氏洋行の計畫が發表された。是れを聞いた刹那、僕は些からず力を落したが、餘程以前からの計畫であつて見れば留めやうもなく、又た半歳やそこらの不在中に吾等の運動が、急轉直下しやうとも思はなかつた。七月十四日出發と豫め承知して居ながら、三四日間顔合せの間もない程、お互に多忙な日が續いた。や

つと電話をかけたのは、當日の早朝であつた。『國府津までお送りする積りですが』と云へば、『私もさう願ひする積りでした』と、待設けたらしく、用ありげな返事であつた。

汽車が新橋驛を發すると、直ぐ田川氏は、同乗の見送人七八人を促して食堂に立つた。まだ一杯のアイスクリームを喰べ終へない僕を、一寸と云つて、別室に連れ去つた。

僕は萬感を胸に湛へつゝ、六箇月間相見ざる可き先輩の別離の言葉に、重大なる意味を期待した。僕と肩を接して腰掛けた田川氏は、腕を胸に組んで、稍昂奮した顔を斜に傾げて、小聲で口を切つた。

『桂公は危篤ださうだ。昨夜遅く秋山君から電話があつた。もう不可いやうだ。』僕は、今の今まで、萬全を期して居た金策が外れたやうな氣がした。人事の奇しき變轉に、悲痛なる失笑をさへ洩したのである。

『残念だが仕方がない。道はまだ澤山残つてゐる。お互に失望す可からず。』田川氏も僕と相見ても、深刻な笑みを洩して居た。

僕にも、失望の氣は、些しも起らなかつた。此の際にも、田川氏の思慮と用意とは、十分に顯れた。僕は氏の説を、一々首肯しつつ、後圖を託された。國府津までの時間の長かつたこと！

九月に入つて南京に於ける、日本人虐殺事件が突發した。八月の初旬に起つた事であるにも拘はらず、日本の新聞紙が、而かも軽く傳へたのは八月の末であつた。外務省の公報は、それから十日も遅れて居る。東京の新聞紙が、重大問題として、大々的に吹聴を初め、所謂知名の政治家なる者が、強硬な意見を吐き出したのは、敢て自慢らしく云ふわけではないが、僕等二三の同志が、此の問題に觸れて、世間の物論を沸騰せしめた後である。

當時の事情を、具さに陳べることは、本文の目的でない。但だ僕は、此問題の爲めに、自己が、蝟集し來る攻撃の矢面に立つた時、痛切に、噫田川氏在るならばと、沁々思つたことを記せば足りる。是れは敢て弱音を吐くのでない。田川氏在るならば、何とかも少し遣れたらうと思つたのである。

十月の末、九月廿九日付倫敦發の重要な手紙を受取つた。僕は、未だ其の時期ならずと認めて、此の手紙の内容を發表し得ざるを遺憾とする。田川氏の政治的事功の爲め特に遺憾とする。但だ氏が、中正會組織計畫の直接の作者であること一言して、満足するの外はない。

洋行中に於ける田川氏の精勵は、遠く相隔てながら、眼の前に見るやうに感ぜられた。殆んど毎日のやうに、都新聞に掲載された『とびく雑記』は、歐米國

民の實際生活を直寫せる點に於いて、全然他に類例なき價值を有する。(序でに曰ふが、僕は田川氏の文章を以つて、日本將來の文體の先驅だと信ずる)。漫然たる皮相の觀光記の倫でない。政治家の頭腦と、事務家の眼と、文士の筆とを併せ有して、初めて成し得る産物である。氏が、僕等に寄越した私信——漫遊所感や、政治上の緊要事——だけでも、容易ならぬ仕事である。それから氏は、倫敦より亞米利加に渡る船の中で、新聞紙の一頁に互る報告書を認めて、選舉區に送つて居る。市政研究は、今回の洋行の重要な目的であつた。氏は、目下其の視察記の執筆中である。是れが又た、屹度吾々をあつと云はせるに相違ないと、僕は確信して居る。

或人々は、田川氏を精力家だと云ふが、僕は、精勵家だと云ふ。氏は精力家と云ふ柄でない。精力家には、健康を條件とする。氏の體質、體力は並以下である。併し冗談を言はず、酒を飲まず、煙草を喫せず、固より藝者遊びするでなく、唯

だ一向専念に、時間を節約して、孜孜として勉むる精勵に至つては、寔に敬畏の外はない。

田川氏が米國から歸朝した翌日、即ち本年の一月十六日、僕は同行して、尾崎氏を鎌倉に訪うた。僕は、昨年七月以後の政界の狀況を、詳細に報告した後、歐米、特に英國の政治に就いて、具さに聞く所があつた。僕は、氏の健康の著しく増進せると共に、氏の政治的信念の一段と精彩を加へて居るのを見て、愉快に堪へなかつた。政治上の主義、政策は如何にもあれ、今後の政治の中心には、若い者をして當らしめることを原則とせなければならぬ。歐米人は熱が多い。ロイド・ジョーヂの演説は、言々火の燃えるやうだ。こんなことを、氏は語を強くして語られた。歐米視察は、確に氏をして、自ら任ずるの念を強からしめたと、僕は見て取つた。他の土産の何であるかは、僕の問ふ所でない。此の一事、眞に有難き

土産である。僕は、此の事あるを豫期して待つて居たのだと、衷心の歡びを抑へ得なかつた。

今度の議會で山本内閣を倒さねばと、此の鎌倉の會合の席で僕が云ひ出した時、尾崎氏は、今度の議會で倒さうと思ふのは、思ふ方が無理だと、笑ひながら答へられた。田川氏は、何とも云はれなかつたが、何とかなるだらうと云ふ確信はあつたらしくかつた。

それは兎に角、結果は豫期して居た僕にさへ、意外なあの有様に立ち至つた。此の間に於ける田川氏の働きは、目覺しいものであつた。同志會と國民黨との中に立つて、あれだけの結合を形造る努力の並大抵でないことは、低級な常識でも推知し得られる。而して田川氏は、常に此の働き役の第一人者であつた。急言せず、疾語せず、常に三分の餘裕を剩して、行動の自由を保留する氏の性格は、斯

る場合に、最も適當であつた。殊に其の無比な財政知識が、今回の議會に有要であつたことは申すまでもない。

田川氏は、大隈内閣の出現には、些からの責任を有して居る。或る事情に依つて、早くから、是れを希望し、此の希望の實現に著手した人である。随つて氏の努力も、與つて多きに居るのである。が、それだけ、此の内閣出現の故に、氏は、面白からぬ風評をすら受けた。僕は、氏の志を最も善く知れる一人なりと自信して居るから、茲に辯護がましいことを言ひたくない。併し、此の無責任な、心なき風評のために、氏は、誠に氣の毒な迷惑をされた。

世間では、尾崎氏の入閣に就いて非難を加へる毎に、田川氏にも其の責めあることを必ず云ふ。勿論田川氏は、尾崎氏の最も有力なアドバイザーであつたから、尾崎氏に悪い所があつたとすれば、田川氏にも責めなしとは云へぬ。併し氏



を悪評する世間の或者は、餘りに眼孔が小さい、根性が穢なすぎる。博徒は賭博を稼業にする者である。併しながら博徒は、賭博に依つて得た金以外に志がないと云ふならば、それは大なる謬りである。偏僻にして常套的なるお極りの漢籍的人物月旦法は、複雑な政治家の行徑を評するに不適當である。

市政に通じて居る人、事務に長けた人、文章の上手な人、話の旨い人、豫算に精通せる人、と云ふ程度で、田川氏の人物の價直を極めようとするのは、皮相の見も亦た甚しと云はねばならぬ。氏の長所、價値は、時代思潮の真相に分け入り、國民性の源流に遡る、寧ろより多く哲學的な所に在る。文明批評家として、氏は、最も強き印象を與へる素質を有して居る。

此の特長は、又た政治家としての短所の裏書をもなして居る。氏は、常に、日本の政黨員が、會費を納めないのを、口に筆に、痛撃して措かない。仰せ寔に御尤もではあるが、會費を納めない會員ばかりの政黨は、眞の政黨に非すと排斥す

るならば、今日の日本の政治家は、何處にどう動いて行けば善いのか。僕をして率直に言はしむれば、我國今日の政黨の支柱たる者は、黨員に會費を納めしめるやうに訓練するよりも、自分で、必要な金を調達するやうに腕を揮ふのが、遙に急務である。否是れが出来なければ、政黨の首領にはなれないのだ。然るに田川氏は、會費不納黨員の攻撃に忙殺されて居る。

更に復た他の例がある。立憲政治が理性の政治であつて、感情的な日本人は、國民性として、立憲政治に不適當なのではあるまいかとは、田川氏と俱に、吾々も懐く所の疑問であるが、政治は、現前の材料を棄て、成立たない。世俗に迎合することも愚であるが、反抗することも賢き業でない。迎合せず、反抗せず、其の上に大政治家の執る可き態度はあるのである。田川氏のあの反抗的な氣質は、氏を大成せしむるに多大の障礙をなして居ると思ふ。

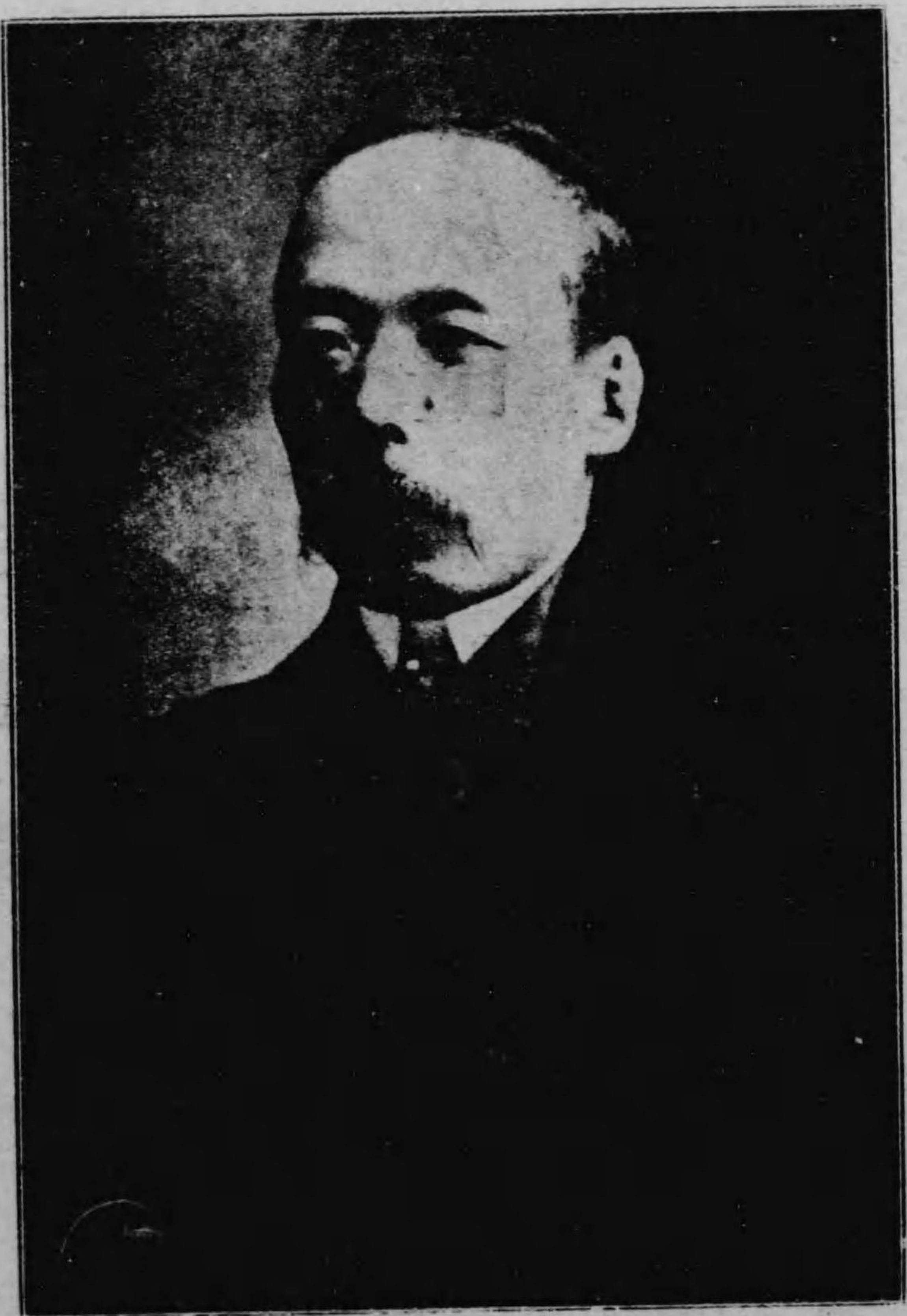
頭の人か、腕の人か、他の語を以つて言へば、批評的政治家か、實際的政治家か、僕は、精詳に田川氏の人物を研究して、大に惑ひなきを得ない。而して僕自身、氏に對して、實際的政治家を庶幾する念の強いだけに、多少の不安と失望とを禁じ得ないのである。

寔に氏の如き人が、現代の濁俗な政黨の中に在るのは、政黨の調子を高からしむるに效多きは申すまでもないが、そんなことは、僕の氏に望む所でない。政務を調査し、國民の生活に喫緊なる政策を立案することは、他人の企及し難い氏の長所である。併し是れも亦た、僕の氏に對する囑望の第一要件では斷じてない。

謙遜な田川氏、自ら能く知れる田川氏の、そんなことは僕の柄ぢやないよと云ふ微笑を豫期して、僕は此の要求を無理に押しつけて置く。

——大正三年八月——

## 秋山定輔論



秋山定輔氏

## 秋山定輔論

昨年正月二十一日、時の首相桂公が、新政黨組織計畫を發表した時、天下は齊しく、——待合の女中や、辻待の車夫までも、——驚異の眼を睜つた。そして其の謀主が、秋山定輔氏であることが判つた時には、政界の黒人筋の者までも、意外の感に撲たれたのである。

二三日経つてから、政友會本部に於いて、あつた、僕は、特殊の理由を以つて、秋山氏の此舉、及び人と爲りに就いて、氏に古くから接近して居る某政客に訊いた。彼れは、唯だもう呆れ返つたと云はんばかりの口調で、秋山も茲まで變節し、墮落しやうとは思はなかつたと、語氣を強くして語つた。

從來秋山氏と、彼れが如き干繋のあつた二六新報社中にも、異論の徒尠らず、

僕の知つて二三の人は、蹶然袂を拂つて退社した程であつた。

僕も、御多分に洩れず、秋山攻撃黨の一人であつた。

然るに其の後、僕が、秋山氏と親しくなつてから、氏と桂公との關係、新政黨組織計畫の動機等に就いて、一再ならず、打明け話を聞いたが、其の當時は、其の人格を信ずる秋山氏の所説であるが爲めに、深く吟味もせず、言葉其の儘を信じて居た。それが一年後の今日になつて、僕自身の經驗は、僕をして、噫秋山氏の眞意は茲だなど、共鳴を感ずるに至らしめたやうだ。非凡な秋山氏のことであるから、僕が今日覺知した以上の他の深遠な理由を有して居るかも知れぬが、僕の今日の見當は、先づ此の邊に在る。

我國現下の政況に對して、幾多の不平のある中で、政黨政治が、英國に見る如く、本來自然の働きを爲さないことは、僕の一番不平に堪へない所である。政黨

とは何等の關係もない山本權兵衛伯が、政友會を踏臺にして内閣を組織したり、多數黨が多數黨の儘、在野黨に落つこつたり、時局と全然無關係な大隈伯が、彗星のやうに飛び出したりする、こんな變體政治に不平だと云ふのである。同時に僕は、此の變體政治が、吾が國現下の政界の實狀であるのに、是れは理義的でないこと云つて、此の事實を除却するならば、最早實際政治はなくなることも、宜く承知してゐる。寧ろ實際政治家は、此の現前の材料を、如何に取扱ふ可きかを考慮す可きであると云ふのだ。そこで僕の本問題が生ずる。

一部の政客や學者が、平常口にする英國流の見地から言へば、實際日本には、政黨は無いのである。政友會、同志會、中正會、國民黨と云ふ名の政黨はあるにはあるが、其れは過去に於ける或る勢に促されて出來たものが、歴史、地盤の相違からして、敵味方と陣を張つて居るに過ぎない。國民の生活に喫緊なる主義、政策を異にするが故に、彼此黨を異にする次第では斷じて無い。偶々異にする所

あるも、それは僅少な程度の差で、寧ろ彼れが地租八厘減を唱へるから、吾れは一割減を稱へやうと云ふ位のものである。随つて政治家たるもの、主義、政見の上から、吾れは必ず政友會に屬せざる可からず、否同志會員ならざる可からずと云ふ程の確然たる理由はない。其の政友會に屬するも、同志會に屬するも、何等かの個人的事情の爲めである。寔に馬鹿氣切つたる話であるが、幼稚な我國政黨の實情は、正に斯の如きものである。所で謹直な理想派の政黨員か、無能無爲の徒ならば、甘んじて、吾れは政友會員なり、或は同志會員なりで満足してゐるが、吾れより古を成す非凡の士は、こんな情境に安閑として居る筈はない。

政黨は——政治家も亦た然り——政權を執り得るが故に有意義である。然らば政黨の首領は、必然に總理大臣たらねばならぬ。知らず、何時日本の政黨首領が、内閣を組織したか。憲政黨内閣時代の大隈伯は、寧ろ一時の變態で、言ふに値ひせぬ。伊藤公は一度、西園寺侯は二度、政友會の總裁として内閣を組織したけれど

も、あれは政黨の首領であるよりも、より多く、一個の伊藤公であり、西園寺侯であるが故に、所謂大命は下つたのである。過去は此の通り。若し將來に於いて原敬君か、加藤高明男に、内閣組織の大命が下つたならば、其の時こそ、初めて正式に、政黨の首領なるが故に、總理大臣たり得たるものである。

斯の如く、我國の政黨が眞の政黨に非ず(一)、我國政黨の首領が、内閣組織の力を有せざる(二)が故に、此の過渡期に於ける變態に應じて、或る變則の手段を執ることは、正當に認容されなければならぬ。何であるか、内閣組織の資格ある政治家を本位として、或種の活動をすることは是れである。

秋山氏自身及び桂公親近者の話に依れば、秋山氏が、桂公に接近した當初の目的は、立憲同志會の組織に在らずして、支那問題の根本的解決に在つた。政黨組織は、此の大なる政策を實行する便宜の手段として選ばれたに過ぎぬ。僕は、此に

秋山氏の支那に對する意見の内容を紹介することを止めて、唯だ一語、達見であり、實際的であると言つて置く。而して秋山氏が、日本帝國百年の長計たる支那問題解決の大手腕を、桂公に於いて見出したことは、公平な批評家の一様に肯く所である。特に兩者從來の行懸り、感情を忘却して、桂公を、吾が理想の適當なる實行者と認めた點は、秋山氏の偉大と識見と愛國の至誠との表證である。特に、我が國の變則なる政界に處する非凡なる實行家の表證である。

桂公薨去の後、弔合戰の爲め、(僕は斯く言ふ可き理由を有する) 山本内閣を倒すまでは、反對黨中堅の第一人者として、晝夜奮闘した秋山氏が、其後殆んど全く政界の退隱者同様の境遇に居るのは、吾が志を行ふ可き適當の人物が無いからであらう。桂公の遺言に因つて、其の後を承けた加藤男の人物も、秋山氏のことであれば、手を盡して、研究されるだけ研究したであらう。秋山氏は、後藤男に最も多く望みを囑する人である。併し後藤男は、氏と同様、今は政圈の外に居る。

寺内伯も、氏に取つては、看逃す可からざる人物の一人である。伯の出身、所屬の系統が何であれ、吾等の提出條件を容れるならば、總理大臣たらしめるも宜いぢやないか、と云ふのは、秋山氏の意見であらう。又た秋山氏が、原敬氏を知らぬ筈はない。政友會に對する秋山氏の計畫は、氏に特性的な深刻を極めたものに相違ない。併し秋山氏と、原敬氏及び政友會との關係は、秋山氏の所謂縁未だ熟せざるものかも知れぬ。

秋山氏は、寔に政界の偶像破壊者である。常に何事にも新機軸を出す人である。吾れより古を成すの人である。凡人を縛る規矩繩墨の囚ふる所とならざる人である。嘗て敵であつた者と、今味方となるが、何の變節か。無益な空論派の批評家は、唯だ氏の失笑を買ふに過ぎないのだ。

僕が、尾崎氏から、秋山氏への紹介狀を頂戴したのは、一昨年の七八月頃であ

つた。當時秋山氏は、支那に行つて居られた。歸られた後も、お訪ねしやう／＼と思つてる中に、翌年正月の同志會組織の發表となつた。訪問も、これで沙汰止みとなつた譯である。

が、それも僅か五六箇月間であつた。田川氏の洋行後間もなく、僕は、必要に驅られて、秋山氏を訪問することゝなつた。

僕は政治上の或用件を齎して行つたのである。初對面の挨拶を終へて、此の要件を簡單に述べた。氏は、直接此の要件に答へないで、極めて熱心な調子で、一語々々力ある言葉で、現代青年の無理想、無信仰、無氣力を痛論した。

僕は、尠らず面喰つた。詳しく言へば、氏の高遠深刻な理想論に對して、僕の齎した要件が、餘り平凡で、低級であつたのを愧ぢたのである。僕は、辭するに臨んで、あからさまに、此の旨を氏に語つた。すると氏は、調子を變へて、「初めて逢つた方に、こんな事を云ふのではなかつたが、お目に掛るのは初めてでも、

多少承つて居ることもあるので、つい』と、云つたやうな辯解をされた。

僕は、尾崎氏や田川氏から、秋山氏が、稀有な非凡の士たることを、毎々聞いては居たが、今日の初對面が、かう云ふ風であらうとは、夢想だもせなかつた。僕の經驗では全く未曾有の事であつた。

其の頃秋山氏の精力は、非政友派の糾合に盡された。何とかして、お互に國家の爲め、誠意誠心を披瀝して、大なる活動の基礎たる可き大政黨の樹立を期したいと云ふのは、其の日夜夢寐にも忘れ得ざる念願であつた。山本内閣を倒すには、非政友派の糾合より外に策はなかつた。困難は、國民黨の態度に在る。然り、其過半が同志會に去つた残りの國民黨員に在る。

此企畫の成否は、見様に依つて、孰れとも判せられる。秋山氏等が盡した努力に比して、今日の狀況を見れば、失敗に終つたとも言へる。併し成功の區域に足

を入れるのは、是れからだとも出来る。僕は、秋山氏の意、後者に在りと信ぜざるを得ない。

秋山氏は、所謂個人運動に依つて、同志の糾合に力めた。更に手を變へて、政友會に打撃を加ふ可き問題を利用して、同志の結合を計らんとした。併し孰れも、意の如く進捗しなかつた。桂公在世の時には、公を中心として、是等の企畫は立てられた。極端なる人物中心論者である秋山氏が、桂公を失つた後の運動は、甚しく不利なものとならざるを得なかつた。氏の眼中、大隈伯は元氣なお爺さんとしてより以上に映じなかつた。桂公薨去後間もなく、僕は、大隈伯を同志會の總理に戴いてはどうかと提案したことがあつた。是れを聞いた秋山氏は、心の底から溢れ出る無邪氣な失笑を抑へ得なかつた。七十六のあのお爺さんはと云つて肩を揺つて洪笑した。其の後で、嚴肅に氏の大隈觀を述べた。要點は、大隈伯の長い政治的經歷に於いて、比較的善く世間に知られたる其の性格に於いて、何處に

政治家的資質の認む可きものありやと言ふに在つた。氏特有の透徹深刻を極めた觀察であつた。

而かも其の後、大隈内閣は出來た。加藤男は、其の中堅である。秋山氏は、現内閣成立の瞬間から、外見全く政界を退隱した姿になつた。同志會組織に際して、氏と協力して奮闘し來つた同志の人々は、大隈内閣の成立に奔走し、成立した此の内閣に依つて、更らに非政友派の合同を完成す可く健闘を續けて居る。單り秋山氏は、風馬牛相關せざる状態に居る。其の傷はれたる健康を恢復す可く、三箇月以上を旅行に過した。心なき者は、氏を忘れ、心ある者は、氏の態度を訝つた。

僕は、嘗て秋山氏の特長を評して、其の秋山式を賞揚した所が、人各誠意を盡して國事に働く、何んの秋山式、某々式の異あらんと云つて、大に叱られたことがあつた。お説寔に御尤もであるが、誠意に變りはなくとも、個性の現はれる所、



矢張り人々の遣口に、それ／＼特色があり、相違がある。就中秋山氏の遣口は、著しく特色が目立ち、異彩を放つ。明治三十七年の初め、陋劣隠險な政敵の爲めに、露探の名を蒙つて、議會を去つて以來、全九年間、全く世間から忘られて居た。其の間の修養は、一生再び得られざる有難きものであつたと、僕は、氏の口から度々聞いた。僕は、之れを信じて疑はない。幼少から、人十倍の苦勞をして來た氏に取つても、此の社會的試鍊は、慥に新しい經驗、痛烈なる刺戟に相違なかつたであらう。併し其の間二回の歐米漫遊はあつたにせよ、九年間の退隱は、ちと長過ぎはせないか。僕は、是れが秋山式であると思ふ。

秋山式の特色は、之れに盡きない。九年間は愚か、一生でも沈黙するものは多々ある。但だ一旦九年間の沈黙を破るや、一代の大政治家桂公をして、政黨組織を決行せしめた、あの天馬空を行く如き鮮やかな大手腕が夫れである。以つて吾が志を行ふ可からずとして、現内閣成立後、直に政界を遠かつたのも、亦た秋山

式の發現である。

然らば刻下の沈黙を破つて、次に現れる秋山式は何であらうか。是れは、今後の政界が如何に展開し行くかの問題と共に、僕に取つて、極めて興味ある事柄である。

僕の觀る所をして大過なからしめば、秋山氏の政治上の大抱負は、内政よりも外政に在る。精確に言へば、支那問題の根本的解決である。日本帝國百年の大計、唯だ是れなりとは、氏の信念である。然らば其の解決方法如何。

何處に利權を取る、何處を吾が勢力範圍にするなどは、末の末である、事務的、外交官の所爲である。要は支那の官民をして、日本に信賴せしめ、日本を仰瞻せしむるに在る。既に吾れに専ら信賴するに於いては、利權問題の如き、刃を迎へずして解く可きである。而かも此の解決方法は、彼我兩國政府當局者の政策、能

力の問題を前提とせねばならぬ。原則としては、袁政府たると、南方革命派政府たるとは問ふ所でない。大隈内閣でも、加藤内閣でも厭ふ所でない。而かも事實を看よ。袁政府をして、吾が此の志を貫かしめやうとするのは、爲すを欲せざる者に向つて、吾が希望を繋ぐと云ふものだ。一方大隈内閣——加藤内閣——は、到底爲し能はざるの徒である。爲すを欲せざる者に、爲し能はざる者を向はしむ、何の收穫があらうぞ。此の意味よりして、支那の政府が、衷心我れに信頼する南方派のものでなければならぬ如く、我國の内閣も亦た無能なる大隈、加藤内閣ならざる或る他のものでなければならぬ。

問題は、秋山氏の希望する内閣は、何人に依つて組織されるかに移る。

秋山氏は、無比の理想家である如く、復た無比の實行家である。實行家であるが故に、我が現下の政局に於いて、内閣組織の資格を有する者は、宮中の信任あり、元老に縁近く、貴族院の氣受け善く、而して非政友派の輿望を擔ひ、大命降

下の刹那に於いて、政友會の一部を羅致するの手腕ある人たる可しと信じて居るであらう。同時に又た理想家なるが故に、擾々たる政客の夢想だも及ばざる所に、やがて實現さる可き遠見を著けて居るであらう。知らず、其の人は誰れか。僕は忌憚なく、後藤新平男なりと答へる。

桂公亡き後に於いて、秋山氏の Political Idol は、寺内伯、加藤男及び後藤男であつた。原敬氏も、決して雲煙過眼されなかつた。併し秋山氏は、黨派の牆壁を撤去するの條件をも認容する程に、原氏を高く買つて居ない。然らば前三者の中で、世間から、一番早く總理大臣になれさうに思はれてる寺内伯と、秋山氏との干繋如何。僕は、氏の伯に對する戀は、最早現在のものではないと斷言す可き理由を有する。即ち夫れは周圍の狀勢が急變して、伯の出べき幕がなくなりかけたからである。

次の加藤男との干繋は如何。僕は、思ひ茲に至る毎に、人間の縁を不思議に觀ぜざるを得ない。桂公は、秋山氏を二つなき政友と重視した。加藤男は、言ふまでもなく、桂公が掉尾の大飛躍たる政黨組織の後繼者に選んだ人である。同一人の桂公が、信任し、重用した加藤男であり、秋山氏である。是れが化學作用か幾何學の公式でもあるならば、秋山氏と加藤男は、直に融合し、一致しさうなものだ。人性解し易からず、今や此の二人者は、極端に反撥し、乖離して居る。

其の原因の孰れに在るかを吟味するは、本文の目的でない。僕は唯だ嘗て秋山氏が、自分は、長い年月、高利貸に頭を下げればかり來た者である。加藤男に頭を下げるのを、何で厭ふものか、と云ふのを聞いたことを記して置く。

後藤男と秋山氏の干繋は、耐久朋の一語に盡きる。耐久朋なるが故に、二人の政治的意見も一致する。長い二人の友誼や、特異なる二人の性格を説明すれば、いくらでも多種多様な文字を並べられるが、要するに此の一語の敷衍に過ぎない。

僕は、今批評を已めて、二人者の結合が、將來の政局に、如何に實現するかと云ふ希望を陳べて置くに止める。

秋山氏が大學豫備門に居た十八の時、父の儀四郎氏は、相場で失敗して、大阪から遙々氏を頼つて來た。上野の森から吹きおろす、骨を刺すやうな二月のから風に吹かれながら、父子は、池の端を幾廻りもした。儀四郎氏は、身の現狀を啣ちつゝ、八月になれば金が出る。誰れか其れ迄喰はして呉れ、ばと悲しさうに言つた。父にも似合はぬ弱音を吐くと、秋山氏は齒痒くも思つたが、吾れは子なり、親なればこそ、子に向つて弱音も吐けるのだと直感したから、咄嗟に決心して、目當てもないのに、私が喰はして上げると誓言した。

秋山氏は、學校で評判の苦學生であつた。自分の學資にさへ窮して居るのに、どうして父の扶助費が出來よう。全二箇月間、闇雲に、無功に、職業を探し廻つ

た。自分は、夏冬の著物も顧みず、三四の友人と共同自炊で、やつと父の下宿料を残り得るに至つた時、學校に制規の時間に出るには、朝は四時に起き、夜は十二時より早く寝ず、食事も往來で麵麩を嚙りながら濟さねばならぬ程忙がしかつた。そして逢ふ人毎に、空を見上げては、『君もう夏になるね、餘程暑くなつたやうだね』と、訊きくした。八月になれば、父を扶助する大負擔から免れ得ると云ふ希望が、現状の窘窮に逼られて、無意識に發露するのであつた。

僕は、或る冬の寒い夜、此の話を、秋山邸の應接室で、暖爐を圍んで、あの素朴な言葉で聞いた時、腹の底から込み上げる涙を止め得なかつた。世間で、秋山氏を策の固まりだの、隱險だの、詭譎だのと言ふのは、全然謬りだと、此の瞬間斷信した。

秋山氏は、借金に就いて豊富な經驗を有つた人である。随つて落語にでもあり

さうな奇談も、世間に傳へられて居る。中には、秋山氏にキャラクターヌチツクな、興味饒い逸話もあるが、僕はまだ直接氏に就いて、之れを確めたことはない。但だ『金』や『借金』に關する實驗から溢れ出た警句や金言は、澤山聞いた。

借金の多きは誇るに足らず、借金力の多きを誇る可しとは、氏の經驗の聲でもあり、又た將來の活動の豫示でもあらう。

借金の原則に二つある。第一は、金の有る人から借りること、第二に貸して呉れる人から借りることだ。いくら親切があつても、無い袖は振れぬ譬への通り、貸したくても、無ければ貸せないぢやないか。又たいくら金があつた所が、三井や三菱は、吾々に貸しては呉れぬ。高利貸の方が、却つて容易く貸して呉れるぢやないか。僕は、こんな話も二三度聞いた。

金には色がある。使つて宜い金が白色ならば、黒色のは、使つては悪い金だ。金の有する色彩は、政治家の最も注意を要すると、語を強くして言はれたことが

ある。

明治二十六年に發刊した二六新報が、二十八年に廢刊した際には、莫大な借金が残つた。此の前後、氏は九十餘回の差押へを受けた。吾が今後の生涯は、借金と言譯けの爲めに過すの外はあるまいと決心した程であつた。どうかすると、體が石のやうに堅く冷へ切つて仕舞ふことさへあつた。何か不可抗力の物があつて、意識せざる瞬間に、殺して呉れ、ば宜いがとは、其の頃絶えず腦裡に徂徠する思想であつた。

暮に迫つた寒の寒い夕方、深川の或る債權者に言譯に行つた。一張羅の襪樓のフロツクを著て、辻車に乗つた。屈託の極、神身俱に疲れ切つて、臉を動かすことすら億劫であつた。或る橋の袂で、笠も被らない年老いた女乞食が、塵箱の中を獵つて獲た一片れの澤庵を、さも旨さうに喰べてるのが眼に入つた時、豁然大悟の思ひがした。下見れば限りもないと云ふ平凡な真理の實物教示に接したので

ある。

桂公は、辛抱が大事だ、若い人には辛抱が肝腎だ、腹を立てちやいけないと、口癖のやうに言はれたさうだ。苦勞が大事だ、苦勞せねば大人物にはなれぬとは、秋山氏のプリンシプルである。過去に苦勞した人でなければ、將來に大事業は出來ぬ。雷に大事に際して、萎縮狼狽するのみならず、大事に際會することすら出來ない、不思議なものだと、感激した口調で、たびく語られた。

秋山氏が再興後の二六新報で、大に活動して居た時、其の錦町の自邸に土俵を造つて、旺んに相撲の稽古を勵んだことは、當時有名であつた。僕は、初對面の際氏のへしやげた耳朶を見て、は、あそれが稽古の記念だと思つた。僕も氏に劣らぬ相撲好きで、現に自宅に土俵を築いて、時間の許す限り稽古をしてる位だから、吾等の間には、度々相撲の話が持上つた。

僕は、大の太刀山最良である。太刀山が中年力士であること、今日の彼れが、復活後の太刀山であること、長い間、頭が悶へて居て、比較的遅く大關になり、横綱になつたこと、而して其の強味に於いて、近代無比の力士であることなど、幾多の特所を擧げて、最良の理由を述べたことがあつた。

秋山氏は、ゆる／＼とバナ、の皮を剥きながら、微笑しつゝ、僕の話の聞き終つて、反對の意見を陳べた。太刀山の得意の手である鐵砲は、技の性質として、非常に強く見える手である。是れが太刀山をして、格段に強く見える理由の一つ。今の東方には、太刀山に匹敵する力士が無い。常陸老い、西の海、駒ヶ嶽衰へた今日（昨年十一月頃の話）東方は正に干潮の悲境である。之れが太刀山を強く見せる理由の第二、と云ふのが其の要旨であつた。第一の理由は、流石に相撲に眼識ある人でなければ言へぬことだと、僕を肯かした。

秋山氏は、人生を戦なりと見、其の戦に處する機能と準備とに於いて、最も卓越せる人である。或時僕が、私は道理を思ふ時に力弱くして、手段たる戦闘に耽らんとする時に、非常な充實した力を覺えると云つたやうな、懺悔みたいなことを話したことがあつた。氏は叱るやうな口調で、斷定的に答へた。人間の本性はさうしたものだ。楠正成が千早城に籠つて、或は藁人形を造り、或は熱湯を濺いで、目に餘る敵の大軍を惱まして居た時には、實戦を知らぬ後世の歴史家輩の書くやうに、朝に夕に、行在所に向つて、涙を流して禮拜したものぢやない。やれ今日は敵を幾人殺したとか、やれ熱湯を浴びて苦しみ廻る敵の有様が可笑しかつたとか云つて喜んでに相違ない。之れでなくちや戦は出来ぬ。

第三十一議會に於いて、反對黨が、山本内閣に肉薄した時、秋山氏の帷幕に於ける作戦と努力とは、驚嘆の外はなかつた。築地精養軒の三十二番室は、山本内閣破壊の策源地であつた。そして秋山氏は此の團體の指揮官であつた。議會が散

會すると、代議士も院外者も、必ず此處に集つた。是非來ねばならぬ秋山氏は、多忙の爲めに、何時も遅くやつて來た。午前一時頃になつて、やつと來ることさへあつた。之れから晩飯を喰ふんだと云つて、洋食などを注文することもあつた。夜の更くるをも知らず顔に、餘裕綽々たるものであつた。

二月九日の夜、明日は議會で、山本首相の不信任案を提出し、之れと内外相策應して、日比谷公園で國民大會を開くと云ふ其の前夜、精養軒で、秋山氏は、尾崎、田川兩氏と久振りの會見を遂げた。第三十議會の最中、秋山氏が、桂公の謀主たることが公になつて以來の會見であつた。

山本内閣倒壊運動に就いて、尾崎氏等の、秋山氏に期待する所は、極めて多かつた。明日は、其の關ヶ原である。些くとも爾後の形勢は、明日の結果に依つて判せられる。獨逸の陸軍當局者の佛蘭西軍擊破の計畫は、宛かも熟練な劇場大道具士が、書割を組立てるやうに正確に容易だと云ふことである。それでなければ

あの神速と猛激とは望まれない。吾々は、山本内閣破壊に就いて、其れだけの準備と確信とを有たなかつた。大戰の前夜、如何に自己に都合宜く解しても、樂觀と悲觀と相半ばして居た。

秋山氏の、尾崎、田川兩氏との談話は、極めて氏に特性的のものであつた。吃々として多くを言はなかつた。『まあやれるだけやりませう』と云ふのが、別れ際の言葉であつた。

十四日の議會で、反對黨は、營業稅廢止案の爲めに、夜の十一時五十分まで健闘した。九時頃僕は、議院俱樂部の一室で、秋山氏に會つた。二人共晩食前だったので、ライスカレーを、僕は二皿、秋山氏は三皿喰つた。僕は今回の成功を喜び、氏の努力を謝した所が、氏は自分の觀測では、依然大悲觀だ。併し些しも働いたやうな氣がしないと云つた。紺羅紗の背廣服に、鼠地の變りチヨッキを着て、左の掌で髭を撫で下す氏の容貌、態度は、日頃よりも、悠然として頑丈なもので

あつた。

一一八

『尾崎君に宜く休まれるやうに云つて下さい。明日議會が休みだつたら、一日寝られるやうに云つて下さい』と、室を出ようとする僕を留めて、繰返し〜言つた。

大隈内閣の組織が始まつてから、秋山氏の態度は一變した。四月十四日の十一時半頃、尾崎氏が、大隈伯に呼ばれて行かうとする時、秋山氏は電話で、約二十分に亙つて、入閣勧誘を拒むやうにと諫告した。吾々は既に自動車を準備して、將に出かけやうとする、忙がしい此の際、長い〜詢々吃々たる電話には、頗る閉口せざるを得なかつた。あの絶倫な實行家が、此の場合、どうしてあんな非實際なことを言ふのだらうかと云ふ批評すら起つた。

併し僅か一日後、僕は、秋山氏の此の意見が、決して空想的なものでなく、極

めて實際的なものであることを知り得た。

秋山氏は、何事にも天下第一等を以つて自任して居ると聞いた。身邊の器物などにも、随分力を入れたものださうな。氏が、廣く深く、何事にも通じて居るかどうかは疑問だが、其の通じたる所に深く徹底して居ることは疑を容れない。其の専門とする政治に於いて、最も然りである。

僕は、嘗て氏から直接こんな話を聞いた。秋山氏が、桂公に接近した當初、閣下が、其の後進者——私も其の一人である——の何人よりも優れて居ると自惚れたら、其れは大なる謬りである。又た事實後進者中に、閣下に優る者がなかつたら、それこそ國家は滅亡だ。理論上、後進は先輩に勝らねばならぬと極言した所が、公も衷心から肯かれたさうだ。

秋山氏の自信力は、眞に及ぶべからずである。氏の特色の第一は、此の自信力に在る。必要の金ならば、出来るのが當然だとは、氏の慣用語である。あからさ

一一九



まに、氏の志を言ふならば、黒幕政治家などは、其の満足する所では、勿論ない。自ら表面の當局者たるを欲するであらう。四十六の秋山氏は、あの非凡な能力を以つて、何時、世間も、彼れ自身も、満足し得るだけの手腕を揮うであらうか。人間の能力の絶頂は、五十歳まである。私も今が能力の絶頂に居る。併し世間は、決して今の私を使つて呉れぬ、若し使つて呉れる時があるとするれば、それは五十を過ぎた老耄の時であると、感慨を洩したことがあつた。

秋山氏は誤解される人だと、能く知友間にすら傳へられる。氏は、誤解の言葉を聞く毎に、誤解が何だと、吐き出すやうに言ふのが常であつた。天下萬人の誤解も、氏一人の自信力には及ばないのであらう。

誤解は、誤解する者の罪か、される者の罪か、猝かに判じ難い。僕一個の趣味から言へば、世間から誤解されるやうな人物が好きである。人の噂をしたり、惡

口を云つたり、人の事功を羨望嫉妬したりする手合は、要するに芝居の仕出しのやうなものだ。見物人からさへ注意されない程の廉つばい者共である。吾々の貧窮を嘲る者は、吾々に一錢をだに惠む同情者でない。自ら恃み、自ら信ずることの厚き者が、時として世間の衆庶を無視するの嫌あるは、人情寔に已むを得ない次第である。併し衆庶の意嚮が、公人の進退を左右する力強き原動力たることは忘れてはならぬ。秋山氏に對する世間の誤解は、氏が仕事をする上に、尠からぬ妨害であることは疑はれぬ。

以前は相撲の稽古までして運動をしたものが、近頃は、一切の運動を止めて、而かも運動したと同じ効果を收める工夫をして居ると、氏は話して居た。運動せねば健康が保たれぬと云ふのは、既に作爲に過ぎぬと云ふのが氏の見解である。曩には喫煙をも止めて居たが、近頃は又た喫んで居る。喫めるものならば、強ひて禁するがものもない。喫みたければ喫み、喫みたくなければ喫まぬ、それが自

然だと、氏は繰返して言つた。

氏は、あれで中々顔を氣にする。美貌なれと言ふのではない、顔に圭角なく、霸氣なく、圓融無礙なれと望むのである。其の點からして、氏は、孫逸仙の顔が氣に入つたと云つて居られた。

氏は、昨年から喜多流の謠曲の稽古を初めた。僕は、謙遜される氏を強ひて、他流ながら、一席謠つたことがあつた。夫人も一所であつたが、夫人の謠の纖巧なのに比して、氏のは極めて豪宕なものであつた。豪放にして力強いのは、喜多流の特色であるが、又た氏の性格の一面を現したものであると思つた。

氏の能樂に関する意見、觀察は、僕の氏に就いて最も敬服したものゝ一つであつた。當時氏は、唯だ僅かに一回、而かも唯だ富士太鼓一番を観たに過ぎなかつたのである。然るに其の言ふ所は、僕等が、十四五年間も、工夫し苦心して漸く知り得た以上であつた。能は、動の極を、靜の極に收めたものだと言ふ言葉もあつ

た。僕は、能は宰相藝ですなと云つた。其の意味は、宰相の人物は、能樂的なれと言ふのである。

——大正三年十月——

## 山路愛山

一三四

山路愛山の名は、極めて古い。徳富蘇峰が國民之友を發刊した時、彼れは、所謂民友社派の文士として、名聲を馳せたのであるから、歳二十三四から、爾來今日まで二十六年間、其の文名を維持して居るわけだ。是れだけでは甚だ平凡に聞える。が、此の平凡な事だけでも、中々困難な事業である。而かも愛山の生涯は、斯く平凡に觀過す可きでない。彼れの特徴は、單に彼れが三十年間、文名を維持し得たばかりでなく、月に歳に、尻上りに實力を増し來つて、今では、推しも推されしめぬ文界の\*



\*重鎮となつた所に在る。

蘇峰や三又は、操觚者としては、彼れの先輩である。民友社派が、文壇の大勢を左右した當初に在つては、前二者は、隨に彼れの先輩たる實力と事功とを顯した。愛山は、彼等に對して、實力に於いて一籌を輸したばかりでなく、蘇峰や三又のやうな華やかな初陣の成功を持たなかつた。併し此の華麗顯赫ならずに、根強く徐ろに進むのが、彼れの特徴である。江戸兒にも似合はない。今日に於いて、誰れが、蘇峰三又を、愛山に優ると言はふか。餘程の低級讀者ならざる限り、直に其の優劣を判じ得る。

愛山の史論家としての地位は、事新しく云ふまでもない。史學に對する彼れの主張、見解から言つて、

彼れは殆んど完全に近いまでに、其の力量を發揮しつゝある。此の點に於いて、眞に當代獨歩の觀がある。何人も、彼れの地位を觀視し得ない。

而かも吾輩が、特に敬服して措かないのは、雜誌記者としての彼れの成功である。彼れの主宰せる『獨立評論』は、日本に於ける殆んど唯一の理想的な雜誌である。茲に謂ふ理想的とは、愛山及び愛山宗一味に取つての理想的で、低級な頭腦の讀者や、雜誌經營者に取つての理想的と云ふのではない。此の意味に於いて、三宅雪嶺の主宰せる『日本及日本人』と雖も、追隨するに足りない。

吾輩は、何時もこう思ふことである。あれ程の發行部數あるアウトルックを有する米國や、ウォォーツ・ウアーを有する英國は、見上げたものだ。是れが日本であつて見給へ、あんな眞面目な雜誌は、決して存續するものでない。大なる雜誌と評判される『太陽』や『新日本』のやうな、吾輩から見れば、極めて内容の貧弱な、不統一な、不眞面目なものに非ずんば、例の煽情的な下等雜誌でなければ、立ち行かないぢやないか。愛山の『獨立評論』は、彼れ自身の主張、趣味を、完全に發揮せる點に於いて、眞に日本に於ける唯一の理想的な雜誌である。

次に愛山の文章である。寔に天下の眞實と稱するも溢美でない。文章の第一義は、明達である。第二義は、讀んで面白いことである。愛山の文章は、此に二要件を兼ね有する點に於いて、現代第一等である。而かも彼れの文章の特徴は、此に止らない。其の内容と形式との間に、一幕の隔てもない事は、天分と努力との結果である。若し夫れ、愛山の思想の常に新しき傾向を趁せて、見解の必ず堅實なる實行の上に據ゑられて居る事は、文明批評家として、最も尊重す可き強味である。輕浮淺薄なる文界に於て、此人の文士的生命の長く續く事は、吾輩の最も心強く感ずる所である。(大正三年十月)

## 市川八百藏

一三六

是は市川八百藏の扮せる仲光が、我が子の幸壽を、主君の若君美丈丸の身代りに立てんとする舞臺面の寫眞である。本郷座の九月狂言は、懸賞百圓で投票された相馬大作や、堀越福三郎の綴引、扱ては市川右團次の鯉つかみなどで人氣を牽かうと企てるが、新聞紙の劇評では、二番目の仲光は、非常な不評判である。



んや八百藏のをやと云ふ。併し是れは、八百藏の仲光を攻撃する理由にはならない。獨逸の膠州灣領有が東洋の平和に害あるならば、日本の占有も亦た害ありと云ふ支那の抗議(若し支那が、こんな抗議を出す

\*二番目を喰つたのは、此等の不評判の結果だとも傳へられる。僕は、此の喰はれた二番目を見ないから、喰つたことの可否は判じ得ないが、八百藏の仲光に不評を浴せてる世間の劇評家には、斷乎たる反對の意見を表白する。

劇評家の言に随へば、此の『仲光』は、團十郎が演じてさへ不評判であつた。

ならば)と同様に、無價值、無根據な言分である。

更に又た劇評家の理由が、あの狂言は、白澤山で、科が妙く、變化に乏しいから不可ないと云ふのならば、吾輩は、彼等の無識見、無眼識を憐むの外はない。さうして此等の劇評家の多數が、男女學生上りの素人に依つて演ぜられる、あの白澤山で、(それも理解難なる)科少き(日本人に取つて不自然極まる)翻譯劇の謳歌者であるから笑はせるぢやないか。世間の批評なんてものは、こんなに下らぬものだ。こんな下らぬ批評を氣にせればならぬ俳優は氣の毒な稼業だ。

聞く所に依れば、八百藏は、努めて師匠の行き方を株守して居ると言ふことである。八百藏の成功は、大したものだ。彼れは、演出法に於いて、舊型を棄て、あの劇にふさはしい新式の技巧を見せて居る。而して其の技巧に依つて表現される仲光の性格、劇全體の氣分は、極めて實人生的である。八百藏の内にと裏んで行く力は、驚くべきものであつた。

さるにても故團十郎は、眞に不出世の名優であつたと、今更ながら渴仰される。彼れは、晩年に及んで、活歴なるものを稱へ、且試みた。活歴の言葉は古いが、内容は、今の所謂史劇を、傳來的の舊型を離れて、新しき演出法に依つて、演じたものである。僕は彼れの技藝と、併せて其の見識を讀する。今後の劇壇は此の方向に進む可きものと信ずる。材料を古今の執れに取るかは、問題でない。其の材料を仕活すに、新しき演出法を以つてすれば宜いのだ。今の所謂新派劇は、材料を今日に取つて、而かも其の演出法は、舊の舊なるものに墮してゐる。

五十五の八百藏は、年少の歌右衛門、幸四郎、羽左衛門になき新味を有して居る。名優團州の遺績なるか、抑も彼れ自身の特質か。僕は、常に多大の興味を以て、彼れの藝を見る。(大正三年十月)

一三七

長島隆二論



長島隆二氏

## 長島隆二論

昨年の十一月六日、埼玉縣の浦和町で、長島隆二君の補缺選舉立候補發表の演說會が開かれた。僕は尾崎法相に隨つて同地に赴いた。僕等にも舊知の何とか云ふ劇場に行けば、丁度長島君の演說の最中であつた。僕は、同君とは極めて昵近の間でありながら、演說を聴くのは、是が初めてであつた。一昨年の夏から秋にかけて、桂公重患の折にも拘はらず、長島君は、各地に同志會黨勢擴張の演說に出かけた。歸京すると、何時も僕に向つて、演說會の好結果であつた得意話をしたものだ。役人上りの政黨員、新しい生活が面白くて堪らないんだらうと、時とすると、僕をして思はしめた位であつた。其の頃秋山氏は、長島君は、中々演說が旨いさうだと云つて居られた。

僕は、此の劇場で、初めて長島君の演說を聴いて、大に驚いたのである。其の

態度なり、修辭なり、音聲なりが、驚くべき程に雄辯家的であつた。尾崎氏も興に驅られて、樂屋の辯士控室を花道の蔭まで出て、演説者の態度を覗かれた。

僕は、歸京して、君の雄辯には全く驚嘆した、何時何處で稽古したのかと訊いた所が、長島君は微笑しながら、學生時代には大にやつたものだと言へた。

十二月の中頃であつたか、對支聯合會の主催になる國民外交同盟會の集會が、築地の精養軒で開かれた。此の席で、長島君は東京に於ける初舞臺を勤めた。寺尾亨博士、國民黨の守屋此助君、中正會の岡部次郎君、政友會の小川平吉君の演説が濟んで、最後に長島君が演壇に立つた。

彼れは、新進の政治家であるが故に、彼れの立場が、此の會と興味ある對照を造るが故に、一段の喝采に迎へられた。彼れは、稍赤味を帯びた顔を仰向けつゝ、徐ろに口を開いて、自分は、東京に於ける公會の演説會に臨むのは、是れが初めてあると斷つた。而かも語調は急轉して、舌鋒鋭く、現内閣の外交方針と財政

策とを、諷刺的に攻撃した。滿堂の聴衆は、故意にか、不意にか、破れるばかりに拍手喝采した。長島君が語を進めて、得意の支那問題に言及し、『此の問題の根本的解決法は、支那政府をして、從來執來りし傳說的列強操縱策を放棄し、歴史的關係に於いて、地理的關係に於いて、商業上の關係に於いて、將た軍備上の關係に於いて、最も密接なる我が國に信頼せしむるに在る。是れ實際的の意味に於ける支那の領土保全主義である。或は亞細亞モンロー主義とも謂つべしである』と高調した時には、滿場一齊に拍手を浴せた。其處此處に、過激なる非政府的絶叫すら起つた。演壇の左側に席を占めて居た秋山定輔氏は、包み切れぬ悦びを滿面に湛へて、動もすると開ける口を隠すべく、掌で上髭を撫で下し撫で下した。長島君が、約一時間に亙る演説を終へて壇を下ると、左右から凱旋將軍を迎へる様に、多數の人が挨拶した。政友會の人々が、特に敬重に挨拶をして居た。今日の演説は、僕が曩に聽いて驚嘆した浦和の選舉演説にも優つた成功的なもので

あつた。前の三辯士のは聞かなかつたが、小川平吉君の如きは、較べものにもならなかつた。僕が特に著しく感じたことは、小川君等の如き老成家になき熱と意氣と、而して進歩的な思想とを、最も多量に長島君が有して居ることである。日頃懇意にして居て單獨に看れば、左程でもないが、斯うして公會の席で、他の老人連と對比して観ると、此の點が、際立つて僕の注意を牽いた。

長島君の此の演説は、彼れの政治的力量を顯著ならしむべく、極めて大なる成功を齎した。同時に彼れの非政府的思想を、露骨に天下に發表した。

議會では、政府と反對黨との接戦が、勝り日に々々激しくなつた。十二月二十三日、分科會で、増師案を豫算面から削除した時、如何に神經遲鈍な在朝在野の政客にも、決戦の題目は明瞭した。政友會は、結束の頼れない中にと、二十四日は夜にかけて、豫算總會を開いた。明日は本會議との振込みである。

其の豫算總會の前であつた、同志會は、長島君の態度の爲めに、甚しき混亂を惹起した。二十二日に開かるべき代議士總會は、豫算總會の目前に迫つた今日まで、未だに開かれずにをる。長島君は、除名を覺悟で、豫算總會に於いて、政府案に反對の演説を試みるべく幹部に通告した。院外團の數名は、院内に長島君を訪ふて強硬な談判を試みた。漸く河野總務の扱ひに依つて、長島君の豫算總會缺席で落着した。其の夜八時に豫算總會が濟んでから、同志會は、本部で代議士會を開くと云ふ奇現象を呈したのである。

長島君は、二十五日の本會議にも出席しなかつた。

長島君の反政府の思想が、何處から來たかは、今釋ぬべき順序でない。彼れは、議會開會前、同志會の評議員會で、現政府及び同志會幹部の爲す所は、斷じて同志會立黨の趣旨と相容れない。廢減稅決行の責任ある吾黨は、今の時期に於いて、將た政策として、増師を斷行するの矛盾を敢てすべきであるか。此の増師を斷行



する爲めに、解散を辭せざる如き、政治を知らざるも亦た甚しと絶叫した。

二十五日、彼れは、本議會の風雲を後に見て、伊勢參宮に赴いた。

目下長島君と最も親しい僕は、最も晩く彼れを知つた。彼れと親しくなつた後漸く知り得たのであるが、第二、第三次桂内閣で、公の帷幕に在つて、最も有力な部分を働いたのは、長島君が随一人であつたさうだ。然るにどう云ふものか、僕は、得て斯う云ふ方面に眼を着ける性質であるに拘はらず、長島隆二の名すら知らずに居た。第三次桂内閣が成立して、僕も一兵卒として分相應に、桂内閣と對戦して居た際に、郷友中野耕堂の口から、數ば長島君の名を聞いた。耕堂は、青年主義の鼓吹者で、又た實行者である。彼れは、其の頃、時々思ひ出したやうにやつて來ては、『おい、横山君、もう尾崎や犬養のやうな老人を擔ぎ廻るのは止せよ、見つともないぢやないか。己れ達だけでやろうぢやないか。』と、指先きで

薄髭を捻り、鼻をくすくす云はせて、僕に忠告しながら、斯の主義の働き者として、長島君の人物、手腕を、公平に僕に傳へたのである。僕は、長島君との交友に於いて、何等世間的の紹介者を有たないが、長島君の人物を、僕に印象した點に於いて、中野耕堂は、慥に此の上なき紹介者である。

一昨年五月の初め、僕が政局觀に行き詰つた際、不圖腦裡に、世間の所謂非政友合同案が浮んだ時、選むべき接觸者を、本能的に、長島君に於いて見出した。直ぐに電話もて會見を申込んだ。青年主義者に取つては、世俗的形式は無價値である。僕は横山雄偉だ、僕は長島隆二で、名乗り合ひが濟むと、直ぐに舊知の仲であつた。

鎌倉に病んで居た桂公の眞意は、長島君を通じて、具さに知ることが出來た。吾々は、七八月の暑い日盛りを、長谷の三橋旅館で、汗を拭き々々、眼前に燦めく希望など、談り過したこともあつた。

今でこそ、僕の首領尾崎氏は、同志會の領袖連と俱に臺閣に列して居られるが、其の頃僕等が同志會員と會見でもしやうものなら、當時憲政擁護を稱へて居た國民黨側の人々からは、國賊でやもあるやうに攻撃されたものだ。政治は、實際中の實際事なりと言ふのが僕の信條であるから、無益の空論に耽る手合の批評は大して痛痒を感ずる譯でもないが、洩れては事を成すに不便でもあり、殊に横山の仲介で、尾崎先生が後藤男に逢つたとか、桂公と握手したとか、根もなき噂の花が咲いて、先生を圍繞せる清議家の神経を痛めては、徒に先生をして、辯解するだけの勞には服せしめなければならぬ心配があるから、僕は出来るだけ細心の注意を盡して、長島君との打合を試みた。が、或事件が動機となつて、僕は、攻撃の矢に蝟集されるに至つた。

どちらから言ひ出したか、今記憶して居ないが、九月の初旬、長島君と僕との

間には、南京に於ける日本人虐殺事件を提げて、山本内閣攻撃の火の手を揚げやうとの計畫が成立つた。演説會は、僕の方で引受けることになつた。

僕は、同志の猪股勳君にだけ内情を打明けた。更に菊池武徳氏に頼んで、憲政擁護會主催の演説會を開くべく、犬養氏の承諾を促して貰つた。犬養氏は、數日後、人を通じて、取つて代るの政策なくして、徒に政府破壊を企つるは非なりと云ふ返事を寄越された。是れより先き僕は、輕井澤に避暑中の尾崎先生に書を致して、演説會出席の承諾を得て置いたのである。

憲政擁護會の主催する演説會が不可能となつた時、多血多感の菊池氏は、宜しい、其れでは他に途がある、憲政作振會でやり給へ、吾々も大に援助するからと激勵して呉れた。犬養氏の不承諾はあつても、一應國民黨に交渉する必要はあると云ふので、猪股君は、本部に青地雄太郎君を訪ねた。青地幹事は、婉曲に斷つて、猪股君を、關直彦氏に紹介した。猪股君が、青地君の紹介狀を携へて關氏を

訪ねた時、關氏の口吻、態度に依れば、國民黨本部から、既に此の事に關しては電話があつたらしかつた。關氏の返答は、豫期した通りであつた。

茲まで手を盡くせば、最早國民黨に氣兼ねの必要はないと信じた。舊政友俱樂部派の辯士だけで、中二日を隔てた九月四日、大々的に政府攻撃の演説會を開く豫定であつた。

妙な事がち合つた。九月三日は、剩餘金問題に關して、政友俱樂部の在京代議士會が開かれる日取りであつた。其の三日の朝である、東京の新聞紙は、朝日、日々等の大新聞紙を初めとして、孰れも一段半以上に互つて、政友俱樂部動搖の記事を掲げた。何故に動搖するか、其の原因として傳へられる所が、極めて摩訶不思議である。曰く、同志會と政友俱樂部の策士連が、外交問題を楔子に非政友合同を企てた。こんな不都合な奴は、憲政擁護會の要素たる政派（政友俱樂部）の中に置けぬ。こんな不都合な奴が居るからには、俱樂部は宜しく解散すべきだ、

と。斷つて置くが、是れは新聞紙の記事である。政友俱樂部の代議士は、豫定通りに、剩餘金問題を簡單に協議した。併し此日の會合は、新聞紙の記事では、俱樂部解散の下相談會と傳へられた爲めに、政友俱樂部の事務所は、朝來未曾有の大入であつた。僕は、午前に輕井澤に行つたから、後の狀況は知らないが、何でも、あの餘り廣からぬ事務所は、新聞記者で立錐の地もなかつたと言ふ。

政界と云ふものは狭いものだ、僕は初めて經驗した。狭い一廓内の學校生活でさへも、もつと廣いがなあと感じた。二號見出しで、麗々しく書き立てた新聞紙を束ねて、輕井澤の尾崎先生に齎した。先生は、乗馬服で籐椅子に倚りながら、鼻目鏡を右手の指に抓んで、新聞の記事を看終つて、

『かうならうと想はぬでもなかつた。』

と冷靜に言はれた。僕が輕學を詫びると、一向氣にもせぬらしく、『西班牙公使と遠乗の約束をしてあるから、二三日して歸らう。』

と、顔の筋肉一つ動かされなかつた。終列車に間に合ふやう、僕を、乗馬で停車場近くまで送られた。狭い世間に、此處ばかり廣い氣がした。

其の夜晩く、僕の歸京を待受けてた長島君に會つた。長島君は、其の特有の何時に變らぬ樂天的な面地で僕の手を硬く握つて、

『お骨折りだつた、サンクス、サンクス。何時もあの手だよ、國民黨の遣口は。加藤政之助君のやうな老人は、是れで葬られてしまふからね。若い者は却て發奮するよ。』と、慰め顔に言つた。

續いて二人共、元氣宜く大笑ひした。

東京の新聞紙は、翌日から申合せたやうに、南京事件で、紙面の大部分を埋めた。紙上の勇者たる知名の政治家は、吾れ勝ちに『強硬なる意見』を吐き出した。政友會以外の政黨は、異口同音に、外交刷新、内閣鞭撻の決議をした。記せよ、此の事件は、八月の十一日に起つたのである。僕は、馬鹿々々しくて、失笑を禁

じ得なかつた。が、此の失笑の裡には、輕き復讐の満足をも含まれて居た。

營業稅廢止が輿論となる餘程以前、僕は、長島君から、此計畫の相談を受けた。尾崎先生に話したところが、全廢論で行かふと云ふ説であつた。議會前にあれだけの輿論を捲起した殊勳者の中には、どうしても長島君を數へぬ譯には行かぬ。

第三十一議會が近づくにつけて、吾々の中には、營業稅廢止案で、内閣破壊を期し得るとの確信が強くなつた。其の頃、長島君は、眞率に、加藤内閣の樹立を豫想して、愕堂先生(長島君の言葉の儘)入閣の承諾を得て呉れると、僕に頼んだ。尾崎先生に話すことは、と僕は大に躊躇したのである。

『話すとは話して見るが、加藤男に大命が下るだろうか。』と、僕は當然に疑つた。『大丈夫だ。大臣禮遇だし、殊に三度とも外務大臣だから、宮中の御信任も厚し

するから、大丈夫だよ。』と、彼れは常の如く樂天的に答へた。

大抵の事は、右から左と、尾崎先生に報告する僕も、此の事だけは、久しく胸に秘めて置いた。

大正三年正月二日、僕は、鎌倉に避寒中の尾崎先生に年始に行つた。今日は、是非言はねばならぬと覺悟して行つた。併し機會は、非常に悪かつた。僕は一時間以上に互つて、先生から、衷情を傾けた親切な訓戒を受けた。正月早々嫌な事は言ひたくないがと前置して、平常の先生に見ない感情的な態度、語調で、僕の缺點を指摘して、教訓された。材木座から坂の下へ行く濱邊傳ひの道すがら。政治談どころでは、勿論なかつた。

坂の下の望月小太郎氏の別荘に着いてからは、政治談が初つた。豫め打合した譯ではなかつたが、望月氏の談話の要點は、悉く僕の言はふとすることであつた。氏は、目下の狀勢、加藤男を推すを忍ばねばと痛言した。僕もちよいく同様の

意見を挾んだ。併し一向效果はなかつた。尾崎先生は、黙して答へられなかつた。

越えて十六日、前日に米國から歸朝した田川氏と同行して再び尾崎氏を鎌倉に訪ふた。加藤男の首相問題も、必然に持上つた。今度は、尾崎先生も、或條件の下に承諾された。其の條件も、左程實行の困難なものではなかつた。僕が此の事を長島君に傳へたところが、彼れは非常に歎んで、僕の勞を謝した。

シーメンス事件が突發した爲め、狀勢急轉直下して、山本内閣は議會の閉會を俟たずに倒れてしまつた。清浦子爵に大命が下つたけれども、是れは前例なき悲惨の流産を遂げた。此の採潰し運動に活動して居た時、吾等の間に、大隈伯をとの觀念は、電氣のやうに傳はつた。長島君から正式に其の旨を僕に通じて來た。

『加藤男は承知かね。』と、僕は直ぐに訊いた。

『異存を言つてゐるさうだが、大命が下らないぢや仕方がない。』と、はつきり答へた。吾等の問題は、簡單に解決した。僕は、當時長島君が、加藤男に對して、特別

に個人的悪感情を有つて居るとは、些しも感じなかつた。是れより先き貴族院が、衆議院の院議に反對して、豫算を修正した時、加藤男は、逸早くやまと新聞かで、同志會の海軍費削減論を固執して、貴族院の修正説に賛意を表した。僕は男の談話を讀んで、困つたなと思つた。中正會でも、國民黨でも、衆議院討議中に於ける自説の如何に拘はらず、貴族院修正の趣旨を諒としながらも、院議尊重論を主張すべく決して居た。是れは理義に於いても、當に然るべく、殊に政略上から見て、三派の結合を保つ爲めには、是非院議尊重に一決せねばならなかつたのである。

僕は、加藤男の新聞紙上の談話を讀むと、直ぐに長島君に、何とか纏めやうはあるまいかと相談した。長島君は、宜しいとばかり呑み込んで、早速加藤邸に駆けつけたが、到底駄目だと返事した。『議論ばかりして話にならんよ。』と、額に皺を寄せて居た。

『君の所の大將は、大の理窟屋ださうだから、言ひ出したら退くまい。』と、僕も

當時に於ける僕相當の加藤觀を述べた。

四月十四日、大隈伯に大命降下した翌日、僕は、長島君と電話で或要件を話した序でに、長島君の心理に大變化の起つたことを知つた。僕は、萬事を放擲して、長島邸に車を馳せた。

僕には考ふる所があるから、今の局面から、全然隔離したいと云ふだけで、何等の理由をも述べない。僕は、意外の念ひに餘つて、大聲叱咤せざるを得なかつた。尾崎氏は、大隈伯に、長島君の功勞と人物とを推薦して、是非内閣書記官長をと盡瘁して居られたのである。其れは兎に角、大隈内閣成立の前途には、長島君の努力は、當然に期待さるべきである。今局面から退くとは何事ぞと、僕は不審に餘つて立腹した程であつた。併し長島君の説明を聞くに及んで、僕は、自分の單純と輕擧とを耻ぢるのみであつた。僕等は、尾崎氏を擁して、犬養氏、加藤男と三人同一の地位に在つて、内閣組織の協議をなすべしと主張して居る者では

ないか。尾崎、犬養の兩氏が、正式に大隈伯に招致されたのは、今日が初めてであつた。三人同一資格で協議するどころか、大隈内閣の役割は、加藤男一人の獻立で、ちやんと出來上つてゐるぢやないか。こりやこうしては居られぬと、僕は、長島君に頼んで、精養軒で、田川氏に會見して貰つた。

此の裏面の消息は、勿論田川氏にも、寢耳に水であつた。僕は、一方早川鐵冶氏に逢つて、大隈伯に警告すべく依頼した。田川、早川兩氏が、十五日の午前七時に大隈邸を訪れたとて、新聞記者を驚したのは、此の要件の爲であつた。

大勢は廻らすべくもない。十五日夜の一埒は、僕、今是れを詳記するの自由を有しない。善かれ、悪かれ、人事一として意の如くなるはない。其の夜、長島君の人格と能力とが、燦然たる光彩を發揮したことは、親友たる僕一人のみか、尾崎氏も田川氏も、長へに記憶されるであらう。

明くればもう親任式の日取までも極つて居た。

桂公逝いて、加藤男が同志會の總理となつてから、同志會には、世間の謂ふ非幹部派なるものがあつて、事毎に内訌が絶えなかつた。總會でも開かれると、此の一派は、加藤總理を、眞向から攻め付けるので、本部は鬼門に當ると云つて、男爵は、本部に來ることを、非常に厭がつて居るとさへ傳へられた。

非幹部派の著しい活動は、昨年六月の頃、營業稅廢止問題に於いて現れた。是れは、山本内閣の時、非政友三派が、決戦を迫つた旗幟であつて見れば、公黨の面目上、我黨内閣に、之れが斷行を要求するのは當り前である。此の問題に就いては、幹部非幹部の區別なく、同志會は、擧つて從來の主張を貫徹しやうと努めた。が、同會出身の閣員、特に大藏當局者たる若槻氏は、其の不可能を、既に非公式に聲明した。加藤男固より若槻説に左擔した。事態斯の如くなれば、形勢は逆に戻つて、又たしても非幹部派の活動とならざるを得なかつた。

日獨開戦、此の國民的大事業は、何よりも、先づ加藤男と若槻氏との地位を祝福した。此の大事業が起らなかつたらば、同志會は、由々しき變動に襲はれたに相違ない。同時に内閣も、非常な運命に逢着したであらう。同志會中の非幹部派が、廢税問題を、政略的に取扱つたかどうかは研究の必要がない。中正會（爾後同志會に劣らず、大隈内閣を擁護して居る）も國民黨（後には純然たる反對黨となつた）も、非幹部派と相呼應して、大隈内閣に肉薄したであらう。加藤男去つた後、大隈伯が、依然内閣を維持しやうとは、僕の想像し得る所でない。果して然らば、日獨開戦は、慥に大隈内閣を救つたのである。同時に非幹部派の氣勢を消熄せしめたのである。

長島君が、此の派の巨頭であることは、更めて申すまでもない。

長島君の非幹部的氣勢は、何時までも燃えた。日獨開戦が、廢税運動を終滅せしめた如く、第三十五議會に於ける反對黨の挑戦は、同志會の内訌に留めを刺し

たけれども、彼れ一人は、最後まで單獨に、非幹部的戦闘を續けた。

秋山定輔氏の場合と同じやうに、僕は、今茲にも、人事の奇しき因縁を観るのである。長島君は、桂公の愛婿である。公が、最も信頼して、事に任じた幕僚の一人であつた。加藤男は、公が遺言して推薦した後繼者である。焉んぞ相合すべくして、相乖離するの甚しきや。此に加藤男の性格の一面が覗はれる氣がする。

世間に傳へられる主義なるもの、中に、急進主義や民衆主義は、些からず僕の感興をそゝるが、青年主義（僕の手製に成る成句です。老朽崇拜を止めて、實力ある青年が働くことを意味する。或は新時代主義と言ふべき歟。識者の教示を仰ぎます。）は、僕に生命の犠牲をも要求する。英國現内閣の中堅たるロイド・チャーチルが、今年五十三で、四十六の歳に入閣したことや、他の立者ウ・ンストン・チャーチルが、三十七で閣員となつて、今年漸く四十二であることや、昨年紐育市長と



なつたミッチェルが、やつと三十五であることや、既に二度まで内閣議長となつたブリアンが、五十五の壯齡であることなどの、遠い西洋の例を引くには及ばない近い話が、今度の議會を看れば分る。開會劈頭の質問戦に於いて、政友會の幹部は總務を戦線に立てないで二流以下の後進を當らせたと云つて非難されたが、是れは、コンヴェンショナルな老人崇拜、形式尊重以外には、何等の謂れもなき非難である。看給へ、二十五日の決戦に於ける元田肇君の演説を。本人は、私は演説は下手でありますと、再三斷つて居たが、僕は元田君の不成功を、演説の下手なるが故にと解釋することが、既に彼の舊式である證據だと思ふ。演説には、技巧もあれば内容もある。併し僕の理解する技巧なるものは、内容を離れて、其の價値を定めらるべきものでない。依つて切り詰めて言へば、元田君の不成功は、其の人物の價値なき結果である。二流以下と貶された小川平吉君、松田源治君、竹越與三郎君が、どうして元田君に劣れりと見ることが出来るか。又た政府側に在

つても、田川大吉郎君の演説が、大石正巳君のに優らずとは、餘程低級な頭腦でなければ判定し得ない筈である。吾々は、事實を事實として觀なければならぬ。中村梅玉、殊に中村歌六（俱に七十以上の老人）の演出法の或部分を、現代の觀客は、滑稽の感なしに看得ないのである。政界や實業界に於いては、何故に老人でなければ、重要な舞臺を踏ませないか。天下是れ以上の不合理はない。芝居には、老役がある。此の老役には、二十代や三十代では、一寸むづかしいかも知れないが、政治上の働きには、別に老役を要しない。實力さへあれば善い筈である。僕は、長島君の人物を、吾が青年主義の見地から、特に興味と尊敬とを以つて觀るのである。僕は、彼れの經歷を、年代紀的に精叙するの智識を有たないが、何でも、日露戦争の當時、今の財務官のやうな資格で、倫敦や巴里に派遣されて、或時の如きは、正金銀行倫敦支店の地下室で、五億からの正貨を、徹夜して計算したとか云ふことを、何かの話の序でに耳にしたことを記憶してゐる。彼れは、今

年三十八であるから、日露戦争當時は、二十七八の歳である。第二次桂内閣では、總理大臣秘書官であつたと聞いた。此の内閣は明治四十一年七月に始つて、四十四年八月に終つて居るから、長島君は、三十一、二、三、四の、男子の能力の春を、大政治家の翼の下に在つて大に培つた譯である。當時の彼れの活動振りの目覺しかつたことは、僕、信すべき人から具さに聞いた。第三次桂内閣は、五十餘日の短命ではあつたが、長島君は、三十五で理財局長心得になつた。

看來れば、眞に異數の成功である。是れ桂公の庇援に依ること勿論であるが、彼れの資質より見れば、彼れは、如上の經歷に相應する實力の青年である。僕が知つてからの彼れは、智識に於いて、手腕に於いて、健康に於いて、現代の政治家中何人にも劣らぬ實證を示して來た。

桂公亡き後の長島君は、人生の最も有益な試練を受けつゝある。

『君は、今日まで、自動車で走つて來た人である。』  
と、僕が云つたところが、彼れは言下に答へた。

『今は其の自動車が壞れたので、徒歩で來た君のやうに健脚でなくて困る。』

長島君は、宜く口癖の様に、『一番困難な事には、必ず自分で當らねば。』と言ふ。彼れと二三箇月交際した者は、彼れが、世間で傳ふる如き幸運にのみ乗じて來た人でないことを知り得る。長島君には、苦勞人の素質が見える。天性の才氣よりも、境遇に陶冶された工夫の跡がより多く見える。長島君現在の苦戦は、短日月では終るまい。工夫修養の人であつて見れば、此の短かゝらぬ苦戦より、何物を獲來るだらうか。僕は非常の興味を以つて、彼れの戦闘振りを看、且つ親友の爲めに、此の苦戦を歓迎する。

但だ世間には、青年主義の信徒が尠いので、長島君が青年であると云ふ一事の爲めに、其の進路を阻み、甚しきに至つては、足を取つて僵さうとする者の多い

のを遺憾に思ふ。彼れは、青年であつて實力を有するが故に、常に急進的になり易い。急進主義の戦ひは、概ね苦戦であることを覺悟せねばならぬ。

一昨年の冬であつた、或夜晩飯を喰べながら、長島君は、其の頃數日間の旅行中に讀んだ源氏物語の梗概を話した。

『人生の活寫だ。僕は、是れを讀んで、人情の機微を捉へた作者の天才に驚嘆した。政治家は、是非是れを讀まなきやいかんよ。』

と言つて、光源氏の情事を、詳しく話して聞かして呉れた。此の古典小説に全然無智識な僕は、非常に面白がつて、長島君の注解に耳を傾けた。

吾々の間には、宜く文學談が持上る。僕は、六七年前までは、出来るだけ力めて小説を讀んだけれども、其の後は、天下斯の如く無用の物あるなしときめて、全然顧みなかつたが、此の一二年又た讀み出した。長島君も、財政家であり、政

治家であることのみを聞いて居る人には、不思議な程、此の方面の趣味に饒んで居る。

『議會に提出される議案に精通するばかりが、政治家の能ぢやない、文藝方面の智識がなくちやあ、新時代の政治家にはなれない。』と、長島君は宜く言ふ。

『僕は、若し事情が許すならば、是非著作したいと思つてゐる。政府の財務に委つて知つてゐる事だけは書き留めて置きたいと思つてゐる。が、尙一層文學者的に、是非小説を書きたいと思つてゐる。』こんなことをも話したことがある。

長島君は、政界の新派、舊派と云ふことを口にする。

『原敬の遣口は舊派だよ。桂は、政黨を組織してから、全然新らしい遣方をする積りであつた。同じ政友會攻撃にも、新派と舊派との相違がある。地方遊説に行つても、舊派式の攻撃は、新派の程に歡迎されない。』

長島君最近の政治的行動に就いては、大分色んな批評を聞く。長島も馬鹿な奴だ、おとなしくして、財政演説でもして居れば、將來屹度大藏大臣になれるのにつまらぬ妄動をするものだから、信用を臺無しにしてしまった、と一概に非難する者もある。又た中には、長島は忘恩の徒だ。桂公が政黨組織に着手した時には、大隈伯を、斯の道の先輩と仰いで教えを請ふたものだ。大隈伯の援助の多寡は、天下公知の事實であるのみならず、長島は、山本内閣の僵れた後、大隈伯を引出すべく随分努めたものだ。それが、一年と経たぬ今日、もう破壊運動をやつてる。無責任な忘恩者だ、と、人情に絡んで攻撃する者もある。中には、こんな批評をするものもある。第一段（精養軒に於ける反政府の氣勢）と第二段（十二月二日同志會評議員會に於ける政府及び幹部攻撃）は善かつたが、第三段（議會解散前の態度）は悪かつた。

長島君は、力を籠めて、幾度も僕に語つた。『最後は、僕は、情に於いて譲つた、

けれどもも、もつとく急進的にやらなければいかん。時勢がさうなつたんだ。『僕は、棄身で修業してる。あらゆる苦勞を嘗めて、人物を鍛錬しなければならぬ。懐手して、人の後ろに隠れて、褒められる小廉曲謹を知らんではないが、今日のやうな國家の状態を看ては、そんな意氣地のない無責任な眞似は出来ぬ。』

——大正三年十二月——

## 市川左團次

我國今後の劇壇は如何に成行く乎、何事も新しい物、新しい物と趁り行く世の中である。今尙ほ新派劇の名を保つ現代物専門の一派は、種々な意味からして、最早古い物になつた。松井須磨子を中心とする藝術座は、翻譯物に限つて居るやうだ。或意味から、こんなのは、一番新しいのかも知れないが、斯くの如き不自然にして滑稽な眞似事が何時まで續くものか。所謂舊派たる



\*に今日、最も多く歓迎されてる所以なのだ。さりながら此の歌舞伎は、脚本の内容が、現代の思想と一致しないのと、役者の演出法が變化したのと、以上二種の理由からして、其の過去に

有して居たやうな勢力を將來に望むことは、到底不可能である。然らば何種の劇が、今後の劇壇を支配するであらう乎。吾輩一家の所見では、今日の所謂史劇が其れであらう。而して此の史劇役者としては、市川左團次、抜群の伎倆を有つて居る。

彼れが最近の傑作として、吾輩は、昨年十一月、新富座で見た『佐々木高綱』を擧げる。彼れは此の役に於いて、白も科も、全然新しい演出法に依つた。そして其新しい演出法は、此の場合極めて自然で、

且つ此の脚本、此の役の精神を仕活すに、最も適當であつた。随つて極めて印象深きものであつた。

左團次の缺點は、其の藝の線の荒いことである。市村羽左衛門に見るあの繪のやうな美しさが無い。どうかすると、如何にも素人臭くて、不器用、無恰好に見える。是れは、其の藝に新味の饒い長所の裏面であるかも知れないが、もし少し藝の線を細かくし、科を美にすることは、敢て新味と逆行するわけでは断じてない。左團次は、音量に於いて、現代の俳優の何人にも劣らぬ。洗練に缺くる所はあるが、量に於いて幅に於いて、松本幸四郎の上にある。但だ左團次は、調子を上から出さうとするから、上づつて不明瞭となる。出来るだけ下から、と調子を下げて、呂の聲で最も善く徹るやうに努めればならぬ。此の點に於いて、八百藏は、随に一日の長あるものと云へる。左團次の得意とする史劇は、白に最も重きを置かなければならぬから、彼れは聲音の研究に、一層の努力を要する。

左團次は、又た自由劇場なるものを組織して、翻譯劇を演ずる。吾輩の翻譯劇に對する意見は、前に述べた通りである。西洋の有名なる劇作家の作物を、理解し、研究することは、勿論必要に極つて居る。併しそれは脚本を読めば足りる譯である。是れを上場して演ずるとなると、直に外道に墮する。日本人が西洋人の様子を眞似ることが、既に馬鹿氣な滑稽なのだ。左團次が、こんな無益な滑稽に精力を濫費せないとを希望する。

近頃は、どう云ふものか、素人役者が簇出する。併し要するに素人である。人生の最も困難な藝術を素人輩の敢て試みんとすることが大間違である。演劇は、より多く専門的なるを要する。即ち歌舞伎俳優の素養あるものが、一番有望な譯である。歌舞伎役者でも、舊型を墨守するものは云ふに足らぬ。左團次の自重を望む所以である。(大正三年十二月)

猪  
股  
勳  
論



猪股勤氏

## 猪股勤論

今度の總選舉に於ける政府側聯合軍の聯合難は、果然問題となつた。弘前市でも、大津市でも、丸龜市でも、同志討の形勢が現れた。中央選舉本部の問題となり、内閣の問題ともなつた。前代議士を最先に公認することは、聯合軍の約束である。それでも實際の場合になると、幾多の難問題が起る。併し此の約束を正面から反古にしては、全然聯合は成立たぬ。此等三市の同志討は、此の約束を遵守することに依つて、兎に角正面だけは解決した。

右三市の問題と同時に世間に傳はつた宮城縣郡部の同志討は、到底妥協成立つまじく思はれる。其の選舉區の事情に通じた人の報告に依ると、此の同志會候補者と、中正會候補者との同志討は、結局共僵れとなつて、政友會候補者に、漁夫の利を占めさせるらしい。前回の總選舉でも、其の通りであつたと云ふ。吾々同

志の不利であつて、誠に不幸な事ではあるが、僕は、種々の理由から、此の同志討を、多大の興味を以つて眺めつゝある。それで僕は、單なる傍觀者に止らず、此同志討の渦中に、幾分手を突込んで居る。此の儘形勢が推して行くならば、僕は、更に／＼、深く／＼、手を突込まねばならぬことになるだらうと思はれる。それは、此の同志討候補者の一人猪股勳君が、僕とは無二の親友であるからなのだ。猪股君の相手である同志會の候補者首藤陸三氏は、古い政客として、名だけは豫て聞いて居る。僕、寡聞にして、首藤陸三と云ふ姓名以外に、氏に關して何等の知識も有たない。何でも五六年前、牛込の北町あたりで、首藤陸三と云ふ古ばけた標札を見懸けたのを臆る氣に記憶してゐる。これだけが、首藤陸三と云ふ名に伴ふ唯一の聯想である。其の外には、絶対に何も無い。然るに親友猪股君に勝たせたいばかりに、近頃僕の頭の中には、政界の先輩首藤陸三翁に關して、色んな感情が湧いて來る。公平な人から見たならば、僕が茲に述べやうとする、此の同

志討に對する多大の興味の理由は、極めて理性的でない不純な感情を含んで居るかも知れぬ。僕自身は、至つて公平に、冷靜に書く積りであるけれども。

僕は近頃旺んに青年主義を説く。是れ時弊に激しての言である。前號に長島隆二論を掲げ、今猪股勳論を書くも、吾が青年主義宣傳の爲めである。彼等を、青年主義實行の適材であると認めるからである。時しもあれ、猪股君は、六十七翁首藤君と戰端を開いた。僕は吾が主義の爲めにも、黙しては居られない。

首藤翁は自己推薦の辭として、こんなことを言ひ廻つて居るさうな。『大隈伯は自分が三十年來の親分である。其の親分が、七十八の老軀を厭はで、最後の御奉公を勤めて居られる。どうして自分が、起たずに居られようか』と。

大隈伯出馬の爲めに、天下の老人連が鼓舞刺戟されたことは、如何にも有りさうなことだ。大隈伯の出馬は、寔に老人の爲めに、萬丈の氣を吐くに足るものだ。



併し僕は、あらゆる他の条件を除外しても、青年主義を選む者である。大隈伯にしてからがさうだ。昨年春の政變に際して、伯ならざる他の若い政治家で時局の拾収が出来たならば、それに越したことはなつた。何も大隈伯の偉人たることを否定する譯ではないが、伯に優らないまでも、伯と同じ程度の偉人で、一層伯より若い政治家があつたならば、吾々は勿論其の方を取るべきである。他の言葉で云ふならば、吾々は、伯の老人なるを咎むべきでない、七十八翁を煩はさねばならぬ吾々の意氣地なきを恥ぶべきである。

同じ意味で、六十七の首藤翁も、三十八の後進猪股君に候補を譲つて貰ひたいと云ふのである。昨年春の政變では、大隈伯でなければ、時局拾収が出来なかつた。其の理由は、茲に申す必要はない。事實がさうであつた。併し宮城縣の場合は違ふ。前回の總選挙の結果を見れば分る。殆んど二十年、東京や京都で書生々活をして、郷里では名も知られなかつた猪股君は、てんで成つて居ない準備を以

て政界の古老、郷黨先進の随一首藤翁と競争して、其の千九十五票に對して、八百八十四票を贏ち得た。とても相撲になるまいと豫定して居た郷人を、あつと言はせた。今回若い縣會議員や有志家が、最負力士に力瘤を入れるやうに、猪股君を推立てる熱心には、深い理由のあることである。大隈伯は、自ら好んで飛び出した譯ではない。當時も、其後も、今でも、若い者にやらせたい、加藤男などは其の適任者だと、口癖のやうに言はれる。前回の選挙の結果が示す如く、又た目下對立の形勢が示す如く、宮城縣郡部の候補者は、首藤翁に限つた譯では斷じてない。此の點は、青年主義の爲め、寧ろ國家の利益の爲め、切に首藤翁の反省を煩したい。

御大禮も目前に迫つてゐる、若い者は先きが長い、茲は老人にやらせとくさ、と云ふならば、其れは政治を、私意情實の道具とするもので、吾々の斷じて許さる所、又た大隈首相を初め、加藤外相や、尾崎法相のやうな進歩主義の政治家を

有する現内閣の許さざる所と、僕は信ずる。政治の革新も、選挙界の廓清も、端此に在りと確信する。

政治は戦争だ、勝つのが目的である。併し勝利の性質は、軍事的戦争の其れとは稍違ふ。Political campaign では、終局の戦敗も、程度の勝利として驩迎すべきである。どうせ戦をするからには、相當の犠牲は當然だ、五千や一萬の費用は仕方がない、それが出来ぬやうでは、青年主義者とは云はれない、大にやるさ、此處で大にやるのが青年主義だよと、僕は日夜猪股君を激勵してゐる。

大正元年十二月十三日、四谷見附の三河屋で、憲政作振會の發會式を擧げた。一週間も前から下相談があつて、僕も發起人の一人に推されて居たが、他の要事の爲めに、遅れて出席した。其の爲めか、上座の空席に坐らされた。二十名餘りの會合で、二三の人を除けば、皆初對面であつた。此の牛肉屋で會を開くと云ふ

のが、作振會にキャラクターリスチックだと、先づ思つた。一同安座かいて、牛鍋をつつき、大に氣焔を擧げた。不圖僕は、僕と相對して、獨りきちんと座つてゐるフロックコートの青年を見た。其の沈着な態度、穩かな、幅廣い面貌、其の沈黙、特に洋服で居て、きちんと端座してゐるのが、僕の目に着いた。

宣言書の修正や、會今後の實行方法等に就いて、盛んに議論が持上つた。すると誰れか、

『どうだね猪股君、君の静座法で、此の案を極めて呉れ給へな』と僕と向合つてゐる青年を呼びかけた。青年は、口元に纔かな微笑を見せただけであつた。は、あ、あれが静座だなと、岡田式静座法の名のみ聞いて居た僕は、再び注意の眼を睜つて、更めて青年を見た。猪股君は左の手を正しく膝の上に置き、右の手で不器用に箸を使ひ、落著き拂つて肉を喰つて居た。

政局は旋風の如く廻轉した。閥族攻撃の第一聲を擧げよ、他に先んせられるな

と、歌舞伎座に於ける憲政擁護會の第一回演說會に先つ一日、忘れもせぬ月の十八日、青年會館で最初の演說會を開いた。連日連夜事務所に集つて、策戦を凝した。何時も火のやうな議論が、幾時間も續いた。

越えて二年の正月二十日、桂首相、新政黨組織覺書を發表した。議論の火は、殊に激しく燃え上つた。是れ偽黨也、吾人は偽黨の存在を許さずと云ふ意味の決議を發表した。偽黨は振つてる、作振會の傑作だと、一同大に誇つた。併し桂公の新政黨を、偽黨と決するまでには、些からず議論が闘はされた。そして反對論者は、猪股君唯だ一人であつた。

偽黨と呼ぶのは宜くない、政友會や國民黨と同じく、普通の政黨である。吾輩の政局觀として、我國今後の政界は、政友會に對抗して非政友の合同を企つるか、或は桂公の如き官僚出身の有力な政治家が、起つて政黨組織を斷行するか、此の二箇の道程を辿るべきである。政黨組織を計畫したのは、桂の大飛躍だ、大進歩

だ。又た我國政界の進歩でもある。善いことは善いとせなければならぬ。感情に驅られて、偽黨など、呼ぶのは宜しくないと言ふのが、猪股君の議論であつた。馬鹿なことを言ふな、何んで桂に政黨組織の資格がある者が、あんな閥族の造つたものは、偽黨に極つてると云ふ多數決で、猪股君の意見は葬られてしまつた。

當時は僕自身も、變つたことを云ふ男だ、随分軟派だ位に、猪股君を觀て居た。多數の會員の中で、彼れとは特別に親しい仲でもなかつた。

山本内閣が成立してからは、憲政擁護運動も晨過ぎの朝顔のやうになつた。政友會では、今頃憲政擁護などを稱へるのは晝行燈だと冷笑した。作振會も甚だ振はなくなつた。集會をしても、集るのは極く少數であつた。それに構はず僕は、尾崎先生の意見に依つて、憲政擁護巡廻演說會なるものを企て、一週間二回の割で、東京市の各區に演說會を催した。此の計畫の熱心な援助者、支持者は、作

振會員中猪股君唯だ一人と言つても宜い位であつた。

當時彼れは無職であつた。明治四十五年の總選舉に出馬すべく、東京市役所の吏員を辭したのであつた。友人今岡文學士の家に寄食して、唯だ靜座ばかりして居た。第三十一議會中、彼れは警視廳の注目する所となつて、刑事巡査に附け廻された。朝早くから、猪股君の部屋に来て監視した。彼れは終日靜座して疲れないので、刑事の方で避易した。それ程靜座に熱心であつた。其れだけ靜座に悟得する所があつた。健康も日に／＼増進して見えた。僕は猪股君から靜座の洗禮を受けながら、三年後の今日まで、未だに二十分間と續けて座つたことのない位に、怠惰にして無能なる弟子であるけれども、猪股君を通じて、靜座の輪廓と效果とを覗ふことが出來た。

猪股君が政治運動に熱心なのは、其の性質にも由るだらうが、一つは靜座以外に、何の用事もない身であつたからでもあらう。そして其れが、取分け僕と懇親

になつた理由でもあらう。役者は下廻りから、力士は揮擔ぎから、藝者は半玉から、新聞記者は種取りから、政治家も亦た下走りから。政治家は専門家でなくちやあ、徒弟奉公が必要だ、中年者は駄目だよと、僕が言ふと、猪股君もさうだ／＼と大賛成で、何時もこんな話を繰返し／＼した。

それでも一昨年の四月頃になると、二人の専門政治家も、そろ／＼行き詰つて來た。僕が胸に秘めた非政友合同——桂公と尾崎氏との提携——を、初めて猪股君に打開けた時、彼れは當り前の事だと云はぬばかりの顔をした。九月の初旬、南清に於ける日本人凌辱事件を提げて、非政友合同運動の皮切りに、山本内閣攻撃の第一聲を擧げやうと企てた際、猪股君は國民黨との交渉に當つた。關直彦君や青地雄太郎君から、隱險にして婉曲な拒絕を受けた。斯く彼れは僕よりもより多く表面に立つて働いたにも拘はらず、僕の受けた攻撃の十分の一も受けなかつた。僕は猪股君の有徳の士であるのに、熟々感心した。